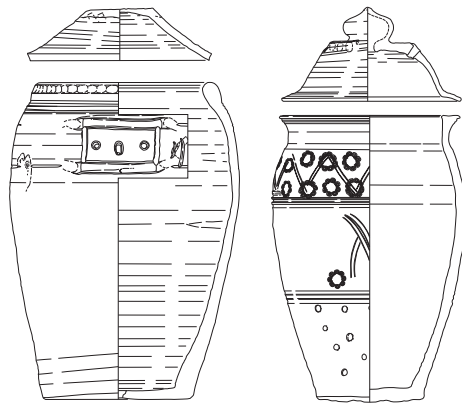


# ミナトの古墓群

億首川流域古墓群ミーチェ地区

国道329号金武バイパス(2工区)建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



19号墓出土蔵骨器

2019(平成31)年 3月

金武町教育委員会





巻頭図版 1. 調査地遠景及び近景

上段：調査地遠景（平成30年12月撮影）

中段：平成25年度・第1次調査区（丘陵北側斜面地）

下段：平成26年度・第2次調査区（丘陵南側斜面地）





卷頭図版2. 08号墓

上段：08号墓近景

下段・左：墓室内

右上：発掘調査作業風景

右下：墓室内 人骨出土状況





巻頭図版3. 15号墓

上段：15号墓近景

下段・左：墓口周辺

右上：墓室内イケ北 掘削前現況

右下：同場所床直上の人骨出土状況





卷頭図版4. 19号墓

上段：19号墓近景（墓庭前方・遺物出土状況）

下段・左：墓口周辺

右上：墓室中央に埋設されたブタ頭骨

右下：ブタ頭骨（下顎骨）検出状況





巻頭図版5. 23・24号墓

上段：23号墓 墓室内確認状況（右上：墓口が閉塞された状態）  
 下段：24号墓 墓室内確認状況（右上：墓口が閉塞された状態）





巻頭図版6. 億首川流域古墓群ミーチェ地区 出土遺物

上段：今回調査区全体の出土遺物（専用蔵骨器・陶磁器類）  
下段：主な蔵骨器（厨子甕）

伊禮元貴氏 撮影



## はじめに

本報告書は、国道329号金武バイパス（2工区）建設事業に伴い、内閣府沖縄総合事務局北部国道事務所から委託を受けて金武町町教育委員会がおこなった埋蔵文化財発掘調査の成果を収録したものです。

億首川を望む下流右岸の丘陵一帯には岩陰墓・堀込墓が多くあり、古くから「ミーチェ」と呼ばれる金武・並里集落の墓域として知られております。今回、金武バイパス道路建設の計画路線にかかる古墓20基余を対象に発掘調査をおこない、これまで明らかではなかった当該墓域の年代理解や墓の構造・形態に関する調査情報、陶製蔵骨器(厨子甕)をはじめとする数々の出土品を得ており、地域の先人たちの営みや、本町の歴史・文化を理解する上で重要な成果を得ることができました。

本書が対象遺跡の調査記録、学術的研究の基礎資料に供されるとともに、広く町民が郷土の歴史・文化、そして文化財保護の重要性に関する理解を深め、町民憲章に掲げる薫り高い教育文化のまちづくりに活用頂くことを願います。

末尾になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に到るまで多くの先生方や機関にご指導ご協力を頂きました。記して深く感謝申し上げます。

平成31年3月

金武町教育委員会  
教育長 比嘉貴一



## 例 言

1. 本書は、沖縄総合事務局北部国道事務所から金武町が平成25（2013）～平成30（2018）年度に委託を受けて実施した「国道329号金武バイパス（2工区）埋蔵文化財発掘調査業務」の成果を収録したものである。
2. 記録保存対象である億首川流域古墓群ミーチェ地区は、国頭郡金武町字金武小字宮城原・田慶志原に所在する。  
発掘調査は平成25・26（2013・14）年度に実施、資料整理・報告書作成を2018（平成30）年度まで金武町教育委員会で実施した。（第1章第3節）
3. 発掘調査並びに資料整理に際しては諸氏・機関に協力及び指導助言を頂いた。（第1章第2節）
4. 資料整理・報告書作成に係る作業は金武町教育委員会において下記のメンバーで行った。（平成27～30年度）  
洗淨・注記 玉城奈緒・屋比久美香子  
接合・復元 玉城奈緒・金城 忍・玉城菜美路・屋比久美香子  
実測・トレース  
（小型品・破片資料を中心に）玉城奈緒・安座間充  
（大型品）（株）埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店  
分類・観察 安座間充・玉城奈緒・佐渡山理沙  
表・図作成 安座間充・玉城奈緒・佐渡山理沙  
図面調製・レイアウト・表紙等デザイン 安座間充  
なお、人骨の整理・分析、金属製品保存処理は民間調査組織へ再委託した。（第1章第2節）
5. 本書の編集は玉城奈緒・佐渡山理沙の協力を得て安座間が行なった。
6. 本書の執筆分担は、本文目次に記載するとおりである。  
なお、被葬者人骨や獣骨埋設遺構については下記の方々に執筆を依頼した。記して感謝申し上げる次第である。  
・第V章【被葬者人骨】  
…土肥直美氏（元琉球大学医学部准教授・（株）文化財サービス沖縄営業所）・青山奈緒氏（（株）文化財サービス沖縄営業所）  
・第VI章第3節【獣骨埋設遺構】  
…菅原広史氏（浦添市教育委員会）  
・附編1【金属製品保存処理】  
…青山奈緒氏（（株）文化財サービス沖縄営業所）
7. 本書掲載の写真について、調査現場における遺構記録写真及び遺物個別写真は、安座間のほか発掘調査支援・資料整理支援業務を再委託した（株）埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店の調査員が撮影した。  
遺物報告中の補足写真（部位拡大等）は安座間が撮影、遺物集合写真は安座間の監修で伊禮元貴氏（（株）東洋企画印刷）が撮影した。
8. 資料整理事業と並行して、発掘調査成果及び資料整理過程の一般公開を目的に、企画展「ずしがめ総選挙—金武バイパス発掘調査出土品展—」を平成30年8月15日～31日に開催した（於：金武町立図書館）。

巻頭図版6 下段写真の蔵骨器配置は、同企画展における観覧者投票の結果による。（得票結果は下記のとおり。）

- 1位. 遺物 No. 107（23号墓）…38票
- 2位. 遺物 No. 037（15号墓）…29票
- 3位. 遺物 No. 065（19号墓）…22票（以下、省略。）

9. 本文中で使用した引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。
10. 本書の題字は町内在住の安富祖宴氏（琉球字遊書家）に依頼して揮毫頂いた。
11. 本書に掲載する発掘調査の記録類（各種図面・写真等）、及び出土遺物はすべて金武町教育委員会に保管している。

## 凡 例

1. 本書掲載図（遺構図等）における座標軸は平面直角座標第XV系（世界測地系）、基準方位は座標北である。
2. 基準高は海拔高（那覇）を使用している。
3. 土層観察・遺物観察等における土色判定は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（マンセル表色系）に準じている。
4. 土層観察表に記載する土壌硬度（≒土層の締めり度合）は土壌硬度計（山中式）による測定数値3回の平均値を記載している。空白は未測定である。
5. 遺物実測図の縮尺は下記のとおり。  
専用蔵骨器：1/6（火葬用骨壺は陶磁器類に準ずる。）  
陶磁器類・貝類遺体等：1/3（水甕等の中・大型品は1/4）  
煙管・金属製品（銭貨以外）：1/2  
銭貨：2/3
6. 遺物実測図とともに掲載する各遺物写真は、正射投影補正をおこなったオルソ画像ではなく通常撮影によるものである。遺物実測図に縮尺上対応するように写真の正射投影に近い箇所を縮尺を合わせている。
7. 各遺物の部位名称、計測位置等については第IV章末（遺物観察表）に記載するとおりである。
8. 遺物観察表中における計測値で、（ ）記載の数値は図上復元等による推定値である。
9. 本書掲載の図・写真・表番号は、【章番号+章単位による連番】構成で記載している。例示すると下記の要領である。  
（例）図2.3 → 第II章で4番目に掲載する図。  
写真4.5 → 第IV章で5番目の写真グループ。
10. 本文中の注釈番号（\*、\*\*…）は頁単位とし、同頁の下に記載するようにした。
11. 小字名称（ハル名）は、必要に応じて初出時にルビを付し、方言表記は片仮名を使用した。なお、表記は下記文献を参考とした。  
\*池原 隆「並里の地名」並里区誌編纂委員会編『並里区誌戦前編』並里区事務所 1997年



# 本文目次

巻頭図版	i
はじめに	vii
例言	viii
第I章 調査経緯及び調査経過	(安座間) 1
第1節 発掘調査に到る経緯	1
第2節 組織体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 遺跡の位置と環境	(安座間) 10
第1節 金武町の地誌概観(位置・概況)	10
第2節 遺跡周辺の地理的・自然的環境	11
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	13
第III章 遺跡概要及び調査方法	16
第1節 億首川流域古墓群の概要及び調査方法	(安座間) 16
第2節 遺構の分類(古墓)	(安座間・玉城) 17
第3節 遺物の分類(蔵骨器)	(佐渡山・安座間) 20
第IV章 発掘調査の記録(遺構及び出土遺物)	(安座間・玉城・佐渡山) 21
はじめに	21
第1節 03号遺構(集石)	22
第2節 06号墓	24
第3節 07号墓	28
第4節 08号墓	30
第5節 13・14号墓	35
第6節 15号墓	39
第7節 17号墓・17'号墓	50
第8節 19号墓	52
第9節 23号墓	73
第10節 24号墓	82
第11節 その他の遺構	
(01号墓・05号・25号・26号遺構)	85
出土遺物観察表・遺物集計表	87
第V章 被葬者人骨の分析	(土肥直美・青山奈緒) 98
第VI章 動物遺体・貝類遺体	109
第1節 脊椎動物遺体	(安座間) 109
第2節 貝類遺体	(安座間・玉城) 109
第3節 億首川流域古墓群ミーチェ地区19号墓出土の獣骨埋設遺構	(菅原広史) 114
第VII章 総括	(安座間) 118
引用・参考文献	120
附編	122
1. 億首川流域古墓群ミーチェ地区出土金属製品の保存処理	(青山) 122
2. 第二十二震洋隊特攻艇秘匿壕跡—緊急調査の記録—	(安座間) 126
報告書抄録	128



## 図・写真・表目次

### —図目次—

図1. 1. 国道329号金武バイパス建設計画及び調査地	1
図1. 2. 平成25 (2013) 年度工程実績	4
図1. 3. 平成26 (2014) 年度工程実績	5
図1. 4. 平成27 (2015) 年度工程実績	6
図1. 5. 平成28 (2016) 年度工程実績	7
図1. 6. 平成29 (2017) 年度工程実績	8
図1. 7. 平成30 (2018) 年度工程実績	9
図2. 1. 沖縄島及び金武町の位置	10
図2. 2. 金武町域	11
図2. 3. 金武町地形断面図	12
図2. 4. 表層地質分類図 (金武町東部・億首川周辺)	12
図2. 5. 地形分類図 (金武町東部・億首川周辺)	12
図2. 6. 金武町域内の埋蔵文化財 (遺跡地図)	13
図2. 7. 金武間切域の範囲変遷	14
図2. 8. 金武町における主な歴史的事象 (歴史年表)	15
図3. 1. 金武・並里集落周辺における墓群分布	16
図3. 2. 明治末期作成間切図にみる「ミーチェ」周辺	16
図3. 3. 「ミーチェ」周辺の地形及び億首川下流域一帯の 民俗地名 (古地名)	17
図3. 4. 億首川流域古墓群及び周辺遺跡	18
図3. 5. 調査地地形・計画路線と遺構位置図 (調査区平面図)	19
図3. 6. 岩陰墓と掘込墓 (分類概念)	20
図3. 7. 陶製専用蔵骨器 (厨子甕) 分類	20
図4. 1. 03号遺構 (集石)	22
図4. 2. 03号遺構 集石検出状況 (平面オルソ補正)	23
図4. 3. 03号遺構 (集石) 出土遺物	24
図4. 4. 06号墓 (断面図)	24
図4. 5. 06号墓 出土遺物 (1)	25
図4. 6. 06号墓 出土遺物 (2)	26
図4. 7. 06号墓 出土遺物 (3)	27
図4. 8. 07号墓 (正面・断面図各種)	28
図4. 9. 08号墓 (正面・平面・断面図各種)	30
図4. 10. 08号墓 (立面・オルソ補正)	32
図4. 11. 08号墓 墓室内磔列検出状況	32
図4. 12. 08号墓 墓室内 人骨・遺物出土状況 (平面・垂直分布)	33
図4. 13. 08号墓墓室内 出土・採集遺物	34
図4. 14. 13・14号墓 (平面図)	36
図4. 15. 13・14号墓 (土層断面図)	37
図4. 16. 13号墓周辺 採集遺物	38
図4. 17. 15号墓 (正面・平面・断面図各種)	40
図4. 18. 15号墓 墓室内 遺物出土状況 (平面・垂直分布)	42
図4. 19. 15号墓 出土遺物 (1)	43
図4. 20. 15号墓 出土遺物 (2)	44
図4. 21. 15号墓 出土遺物 (3)	45
図4. 22. 15号墓 出土遺物 (4)	46
図4. 23. 15号墓崖下・周辺 採集遺物 (1)	47
図4. 24. 15号墓崖下・周辺 採集遺物 (2)	48
図4. 25. 15号墓崖下・周辺 採集遺物 (3)	49
図4. 26. 17' 号墓 (正面・平面・断面図各種)	50

図4. 27. 17号墓周辺 採集遺物	51
図4. 28. 19号墓 (墓正面図)	52
図4. 29. 19号墓 (平面図)	54
図4. 30. 19号墓 (断面見透図)	55
図4. 31. 19号墓 墓室内 (平面・断面図) 及び遺物出土状況	56
図4. 32. ブタ頭骨埋設遺構検出状況 (平面・断面図)	57
図4. 33. ブタ頭骨埋設遺構 (平面・断面図)	57
図4. 34. 19号墓墓底部 土層断面 (東壁・南壁)	58
図4. 35. 19号墓 出土遺物 (1)	59
図4. 36. 19号墓 出土遺物 (2)	60
図4. 37. 19号墓 出土遺物 (3)	61
図4. 38. 19号墓 出土遺物 (4)	62
図4. 39. 19号墓 出土遺物 (5)	63
図4. 40. 19号墓 出土遺物 (6)	64
図4. 41. 19号墓 出土遺物 (7)	65
図4. 42. 19号墓 出土遺物 (8)	66
図4. 43. 19号墓 出土遺物 (9)	67
図4. 44. 19号墓 出土遺物 (10)	68
図4. 45. 19号墓 出土遺物 (11)	69
図4. 46. 19号墓 出土遺物 (12)	70
図4. 47. 19号墓 出土遺物 (13)	71
図4. 48. 19号墓 出土遺物 (14)	72
図4. 49. 23号墓 (墓正面・平面図) ※石積等検出時	73
図4. 50. 23号墓 (墓正面・平面・断面図各種) ※墓室内確認時	74
図4. 51. 23号墓 墓室内 (平面・断面図各種)	75
図4. 52. 23号墓 出土遺物 (1)	77
図4. 53. 23号墓 出土遺物 (2)	78
図4. 54. 23号墓 出土遺物 (3)	79
図4. 55. 23号墓 出土遺物 (4)	80
図4. 56. 23号墓 出土遺物 (5)	81
図4. 57. 24号墓 (墓正面・平面図) 石積除去前	82
図4. 58. 24号墓 (墓正面・墓室平面・断面図各種)	83
図4. 59. 26号遺構 (石切場跡?)	85
図4. 60. 26号遺構 出土遺物	85
図5. 1. 15号墓出土人骨の年齢区分別構成	101
図5. 2. 各部位の計測番号・計測位置	104
図8. 1. 震洋隊特攻艇秘匿壕跡 位置図	126
図8. 2. 震洋隊特攻艇秘匿壕跡 (平面図・断面図)	127

### —写真目次—

巻頭図版1. 調査地遠景及び近景	i
巻頭図版2. 8号墓	ii
巻頭図版3. 15号墓	iii
巻頭図版4. 19号墓	iv
巻頭図版5. 23・24号墓	v
巻頭図版6. 億首川流域古墓群ミーチェ地区出土遺物	vi
写真1. 1. 発掘調査作業風景 (平成25年度)	4
写真1. 2. 発掘調査作業風景 (平成26年度)	5
写真1. 3. 資料整理等作業風景 (平成27年度)	6
写真1. 4. 資料整理等作業風景 (平成28年度)	7
写真1. 5. 資料整理等作業風景 (平成29年度)	8
写真1. 6. 資料整理等作業風景 (平成30年度)	9



写真2. 1. 町域内出土の先史時代遺物（土器・石器等）	13
写真2. 2. 金武グスク近景	14
写真3. 1. 昭和19/ 9/ 29米軍空撮写真にみる「ミーチェ」周辺	16
写真4. 1. 調査着手時 調査地近景（第1次調査区）	21
写真4. 2. 03号遺構（集石）	22
写真4. 3. 03号遺構（集石）	23
写真4. 4. 06号墓	24
写真4. 5. 06号墓 出土遺物集合	25
写真4. 6. 07号墓	29
写真4. 7. 08号墓	31
写真4. 8. 08号墓 墓室内遺物状況及び出土遺物集合	33
写真4. 9. 13号墓	35
写真4. 10. 14号墓	38
写真4. 11. 15号墓	39
写真4. 12. 15号墓墓室内	41
写真4. 13. 15号墓 出土遺物、15号墓崖下・周辺 採集遺物	42
写真4. 14. 17号墓及び17'号墓（仮墓・童墓）	51
写真4. 15. 19号墓（踏査確認時現況）	52
写真4. 16. 19号墓	53
写真4. 17. プタ頭骨埋設遺構 検出状況	57
写真4. 18. 19号墓墓庭 土層確認状況（墓庭前方試掘トレンチ）	58
写真4. 19. 19号墓 出土遺物集合	59
写真4. 20. 23号墓（踏査確認時現況）	73
写真4. 21. 23号墓	76
写真4. 22. 23号墓 出土遺物集合	78
写真4. 23. 23号墓 遺物出土状況	81
写真4. 24. 24号墓	84
写真4. 25. 01号墓、05号遺構、25・26号遺構	86
写真5. 1. 人骨鑑定 記録写真（1）	105
写真5. 2. 人骨鑑定 記録写真（2）	106
写真5. 3. 人骨鑑定 記録写真（3）	107
写真5. 4. 人骨整理・分析 作業工程	108
写真6. 1. 古墓群出土の脊椎動物遺体	109
写真6. 2. 古墓群出土の貝類遺体（巻貝）	112
写真6. 3. 古墓群出土の貝類遺体（二枚貝・ウニ綱）	113
写真6. 4. 獣骨埋設遺構 検出状況（19号墓墓室内）	114
写真6. 5. 19号墓出土のプタ下顎骨	115
写真8. 1. 金属製品保存処理前・処理後	124
写真8. 2. 金属製品保存処理 作業工程	125
写真8. 3. 第二十二震洋隊特攻艇秘匿壕跡	126

## 一表目次一

表4. 1. 古墓一覧表	21
表4. 2. 03号遺構（集石）土層観察表	22
表4. 3. 06号墓 遺構観察表	24
表4. 4. 06号墓 土層観察表	24
表4. 5. 07号墓 遺構観察表	28
表4. 6. 07号墓 土層観察表	28
表4. 7. 08号墓 遺構観察表	30
表4. 8. 08号墓墓室内 土層観察表	32
表4. 9. 13号墓 遺構観察表	35

表4. 10. 14号墓 遺構観察表	35
表4. 11. 13・14号墓 土層観察表	36
表4. 12. 15号墓 遺構観察表	39
表4. 13. 17号'墓 遺構観察表	50
表4. 14. 19号墓 遺構観察表	52
表4. 15. 19号墓墓室内 土層観察表	56
表4. 16. 19号墓墓庭部 土層観察表	58
表4. 17. 23号墓 遺構観察表	73
表4. 18. 23号墓墓室内 土層観察表	74
表4. 19. 24号墓 遺構観察表	82
表4. 20. 出土遺物観察表（1）	87
表4. 21. 出土遺物観察表（2）	88
表4. 22. 出土遺物観察表（3）	89
表4. 23. 出土遺物観察表（4）	90
表4. 24. 出土遺物観察表（5）	91
表4. 25. 出土遺物観察表（6）	92
表4. 26. 出土遺物観察表（7）	93
表4. 27. 出土遺物観察表（8）	94
表4. 28. 出土遺物観察表（9）	95
表4. 29. 出土遺物集計表	96
表5. 1. 各墓出土人骨の推定個体数・年齢区分別構成	101
表5. 2. 男性 / 上腕骨 計測値（15号墓）	102
表5. 3. 男性 / 上腕骨 計測平均値（15号墓）	102
表5. 4. 女性 / 上腕骨 計測値（15号墓）	102
表5. 5. 女性 / 上腕骨 計測平均値（15号墓）	102
表5. 6. 男性 / 橈骨 計測値（15号墓）	102
表5. 7. 男性 / 大腿骨 計測値（15号墓）	102
表5. 8. 男性 / 大腿骨 計測平均値（15号墓）	102
表5. 9. 女性 / 大腿骨 計測値（15号墓）	103
表5. 10. 女性 / 大腿骨 計測平均値（15号墓）	103
表5. 11. 男性 / 脛骨 計測値（15号墓）	103
表5. 12. 男性 / 脛骨 計測平均値（15号墓）	103
表5. 13. 女性 / 脛骨 計測値（15号墓）	103
表5. 14. 女性 / 脛骨 計測平均値（15号墓）	103
表5. 15. 15号墓出土人骨 推定身長（計測値最大長より）	104
表6. 1. 脊椎動物遺体（1）：ヘビ類	109
表6. 2. 脊椎動物遺体（2）：ネズミ科	109
表6. 3. 脊椎動物遺体（3）：マングース	109
表6. 4. 脊椎動物遺体（4）：哺乳類（不明）	109
表6. 5. 脊椎動物遺体（5）：小型哺乳類（不明）	109
表6. 6. 脊椎動物遺体（6）：カニ類	109
表6. 7. 脊椎動物遺体（7）：甲殻類（不明）	109
表6. 8. 脊椎動物遺体（8）：ハリセンボン科	109
表6. 9. 貝類遺体 出土状況（巻貝・二枚貝）	110
表6. 10. 19号墓出土プタ顎骨 観察表	114
表6. 11. 沖縄島内から検出された獣骨埋設遺構集成	117
表7. 1. 各墓の蔵骨器出土状況	119
表8. 1. 保存処理対象遺物一覧	122







## 第Ⅰ章 調査経緯及び調査経過

### 第1節 発掘調査に到る経緯

一般国道329号は名護市から那覇市に到る沖縄本島東海岸の主要幹線で、金武町域を東西方向に横断する。現道区間の金武中川-浜田間は、道路より内陸側が米軍施設に占有され町土利用が制限されるなか、基地ゲートや公共施設、店舗、住宅等が密集、線形不良箇所も複数あり、市街地部で交通渋滞が日常的に発生するなど幹線道路機能の改善が課題であった。内閣府沖縄総合事務局北部国道事務所では、交通渋滞緩和、幹線道路機能向上及び地域交流促進を目的に、金武渡慶頭原-金武中川区間（約5.6km）において平成3（1991）年度よりバイパス道路建設事業に着手している。

金武ダムから金武湾へ南流する億首川下流の丘陵崖一帯には、近代以前の墓群が広範囲に分布しており、ダム再開発事業、米軍施設返還跡地利用など億首川周辺における過去諸開発でも近世～近代の墓を確認している\*。

金武町教育委員会では億首川下流周辺の丘陵・崖地一帯に分布する墓群を包括して「億首川流域古墓群」の遺跡名称を設定、墓群の実態把握に努めていた状況にあって、億首川流域古墓群でも最大規模で、地域の古老が「ミーチェ」の古地名で呼ぶ墓域の南側に金武バイパス建設事業（2工区）が着手されることとなった。

道路計画路線周辺における古墓等の確認目的で予備踏査をおこなった結果、（墓の可能性のある箇所も含めて）8基の古墓を確認した。沖縄総合事務局北部国道事務所と町役場関係課・町教育委員会で埋蔵文化財の取扱について協議をおこなった。路線設計変更は困難であるため、当該工事の影響を被る区域内に所在する古墓群を対象に発掘調査（記録保存）を実施することとなった。

調査原因者である沖縄総合事務局北部国道事務所長から平成25年1月25日付 府国北事第47号にて文化財保護法第94条第1項にもとづく埋蔵文化財発掘通知を沖縄県教育委員会教育長あて進達をおこなった。

平成25年4月12日、「国道329号金武バイパス（2工区）事業区域における埋蔵文化財に関する協定書」を締結、同年5月7日付で発掘調査業務の委託契約を締結して発掘調査（第1次）に着手した。

その後、第1次発掘調査区に隣接する計画区域内で計19基の古墓群を確認したことに伴い協定書変更、翌年度（平成26年度）に第2次発掘調査を実施した。以降、協定書変更（第1～5回変更）及び各年度に締結した「発掘調査業務委託契約書」等にもとづき、平成30（2018）年度まで発掘調査業務を実施した。

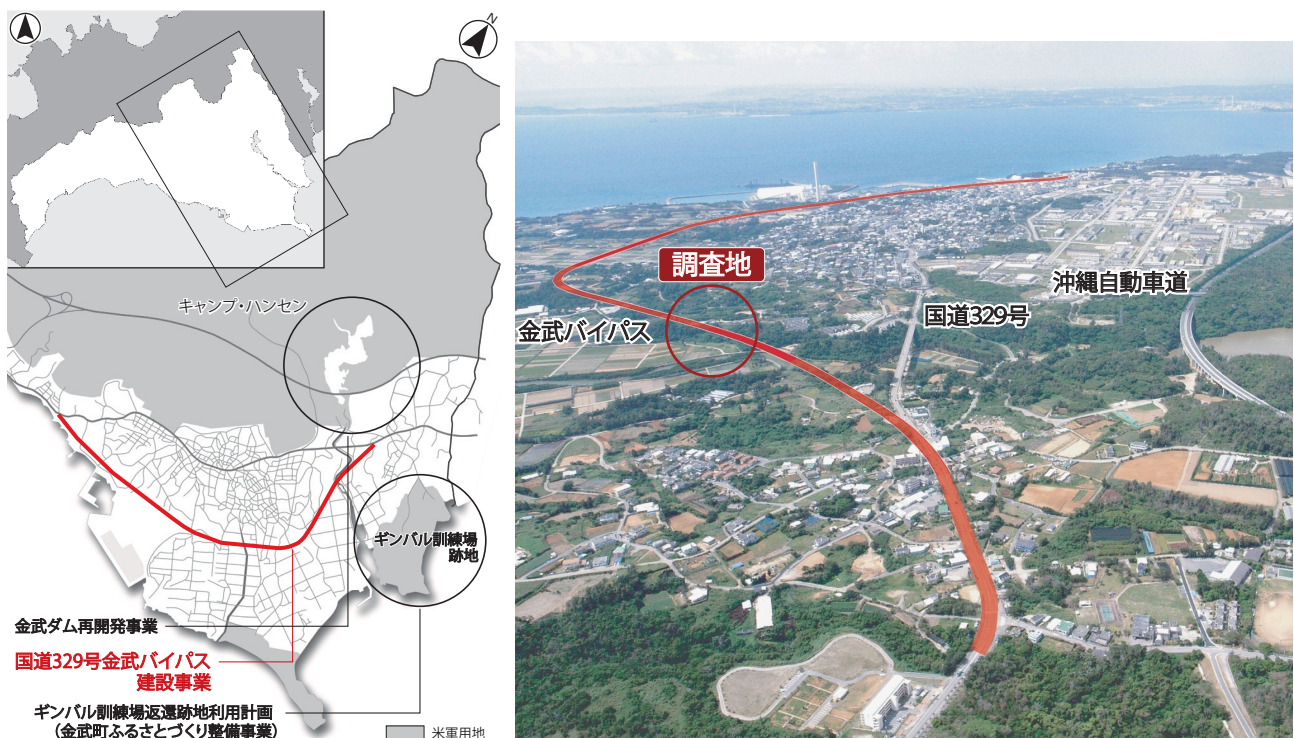


図1.1. 国道329号金武バイパス建設計画及び調査地

\* 金武町教育委員会（編）『奥首の交通遺跡群 億首川流域墓群比嘉原地区 幸地原の炭焼窯跡』（金武町の歴史と文化第5集）2011年  
金武町教育委員会（編）『町内埋蔵文化財予備調査報告書Ⅱ（平成21～27年度町内遺跡発掘調査等）』（金武町の歴史と文化第7集）2018年



## 第2節 組織体制

沖縄総合事務局北部国道事務所からの委託で実施した当該事業における各年度の組織体制は次のとおり。

### 平成25（2013）年度

事業者	金武町長	儀武 剛
調査主体	金武町教育委員会	
調査責任者	教育長	仲間 一（6月25日まで） 比嘉貴一（6月26日から）
調査主管	社会教育課長	安富祖勸
	社会教育課主幹	儀間 権
調査事務	社会教育係長	安座間充
調査担当者	〃（文化財担当兼務）	安座間充
調査補助員	文化財調査嘱託員	玉城奈緒
	同上	金城 忍

#### 再委託業務（1）

発掘調査支援業務委託

受託者 株式会社埋蔵文化財サポートシステム  
沖縄支店

調査員 鶴田貴大・宇田員将

土木施工管理（安全管理等） 上原尚樹

調査補助員（測量・実測等） 荻原 尚／喜屋武志保

発掘調査作業員

伊芸大吾／伊芸 朴／小橋川京子／新田裕哉／

屋比久優／屋比久瑞貴

#### 再委託業務（2）

資料整理支援業務委託（人骨整理・分析）

受託者 株式会社文化財サービス沖縄営業所

主任調査員 青山奈緒

調査・資料整理等作業協力

玉城菜美路／屋比久美香子

### 平成26（2014）年度

事業者	金武町長	仲間 一
調査主体	金武町教育委員会	
調査責任者	教育長	比嘉貴一
調査主管	社会教育課長	新里朝治
	社会教育課主幹	儀間 権
調査事務	社会教育係長	安座間充
調査担当者	〃（文化財担当兼務）	安座間充
調査補助員	文化財調査嘱託員	金城 忍

（再委託業務）

発掘調査支援業務委託

受託者 株式会社埋蔵文化財サポートシステム  
沖縄支店

主任調査員 鶴田貴大・知花一正

土木施工管理（安全管理等） 荻原 尚

調査補助員（測量・実測等） 中島 太／喜屋武志保

発掘調査作業員

安次富正和／伊芸大吾／伊芸 朴／大城和馬／

當山昌吾／仲間大樹／仲間未沙希／屋比久佳佑／

屋比久優／屋比久瑞貴／山名翔太

調査・資料整理等作業協力

玉城菜美路／屋比久美香子

### 平成27（2015）年度

事業者	金武町長	仲間 一
調査主体	金武町教育委員会	
業務責任者	教育長	比嘉貴一
業務主管	社会教育課長	新里朝治
	社会教育課主幹	儀間 権
業務事務・業務担当者		
	社会教育係長	安座間充
資料整理補助員		
	臨時的任用職員	金城 忍
	文化財調査嘱託員	玉城奈緒

（再委託業務）

資料整理支援業務委託（人骨整理・分析、金属製品  
保存処理）

受託者 株式会社文化財サービス沖縄営業所

主任調査員 青山奈緒

整理作業等協力

玉城菜美路／屋比久美香子

### 平成28（2016）年度

事業者	金武町長	仲間 一
業務主体	金武町教育委員会	
業務責任者	教育長	比嘉貴一
業務主管	社会教育課長	新里朝治
	社会教育課主幹	仲間 功
業務事務・業務担当者		
	社会教育係長	安座間充



## 資料整理補助員

文化財調査嘱託員 玉城奈緒

資料整理作業員 屋比久美香子

(再委託業務)

資料整理支援業務委託 (遺物実測等)

受託者 株式会社埋蔵文化財サポートシステム  
沖縄支店

主任調査員 宇田員将

整理作業等協力

玉元孝治／仲宗根理沙／安富祖宴

## 平成29 (2017) 年度

事業者 金武町長 仲間 一

業務主体 金武町教育委員会

業務責任者 教育長 比嘉貴一

業務主管 社会教育課長 新里朝治

社会教育課主幹 仲間 功

業務事務・業務担当者

社会教育係長 安座間充

資料整理補助員

文化財調査嘱託員 玉城奈緒

資料整理作業員 屋比久美香子

(再委託業務)

資料整理支援業務委託 (遺物復元等)

受託者 株式会社文化財サービス沖縄営業所

主任調査員 青山奈緒

整理作業等協力

玉元孝治／仲宗根理沙／安富祖宴／屋比久美香子

## 平成30 (2018) 年度

事業者 金武町長 仲間 一

業務主体 金武町教育委員会

業務責任者 教育長 比嘉貴一

業務主管 社会教育課長 新里朝治

課長補佐 仲間 功

業務事務・業務担当者

社会教育係長 安座間充

資料整理補助員

文化財調査嘱託員 玉城奈緒

資料整理作業員 屋比久美香子

資料整理・報告作成等作業協力

玉元孝治／佐渡山理沙／安富祖宴

## 指導助言及び調査協力

発掘調査及び資料整理・報告書作成の過程において  
下記の諸氏・機関に協力・指導助言を頂いた。(順不同・  
敬称略／所属等は当時)

(発掘調査指導)

禰宜田佳男 (文化庁文化財部記念物課)

水之江和同 (文化庁文化財部記念物課)

田場直樹 (沖縄県教育庁文化財課)

中山 晋 (沖縄県教育庁文化財課)

片桐千亜紀 (沖縄県立埋蔵文化財センター)

瀬戸哲也 (沖縄県立埋蔵文化財センター)

土肥直美 (元琉球大学医学部・形質人類学)

(民俗事例等)

赤嶺正信 (琉球大学法文学部・民俗学)

崎原恒新 (金武町史編さん委員・民俗学)

(陶磁器)

渡辺芳郎 (鹿児島大学法文学部・考古学)

森 達也 (沖縄県立芸術大学美術工芸学部・考古学)

片山まひ (東京藝術大学美術学部・考古学)

倉成多郎 (那覇市立壺屋焼物博物館・考古学)

新垣 力 (沖縄県立埋蔵文化財センター・考古学)

村上伸之 (有田町教育委員会・考古学)

(銘書判読)

仲原弘哲 (元今帰仁村歴史文化センター館長・歴史学)

宮里実雄 (うるま市教育委員会・歴史学)

平敷兼哉 (宜野湾市立博物館・民俗学)

富田千夏 (琉球大学附属図書館・歴史学)

川島 淳 (公益財団法人沖縄県文化振興会・歴史学)

(人骨)

土肥直美 (元琉球大学医学部・形質人類学)

(貝類遺体・脊椎動物遺体)

島袋春美 (元北谷町教育委員会・考古学)

菅原広史 (浦添市教育委員会・動物考古学)

(石器・石製品)

大堀皓平 (沖縄県立埋蔵文化財センター・考古学)

調査協力・資料提供等

内閣府沖縄総合事務局北部国道事務所工務課

沖縄県公文書館 (公益財団法人沖縄県文化振興会)

並里区事務所

金武区事務所



### 第3節 調査経過

当該事業の経過を年度別に整理し記述する。

#### 平成25（2013）年度

事業期間 平成25年5月8日～平成26年3月31日

事業費（精算額） 5,352千円

事業内容 発掘調査（第1次）

経過要約 平成25年4月12日の事業者との協定書締結、

同年5月8日に発掘調査業務委託契約を締結し、翌日から業務に着手した。工事計画区域内で確認された古墓計8基を対象に発掘調査（記録保存）を実施した。08号墓など当初予測を上回る人骨出土があり、資料整理まで年度内終了が困難な状況から、同年9月11日、協定書変更（第1回変更）で期間延長をおこなうとともに、調査支援と別に人骨整理・分析業務を再委託で実施した。平成26年3月24日、当該年度業務を終了。

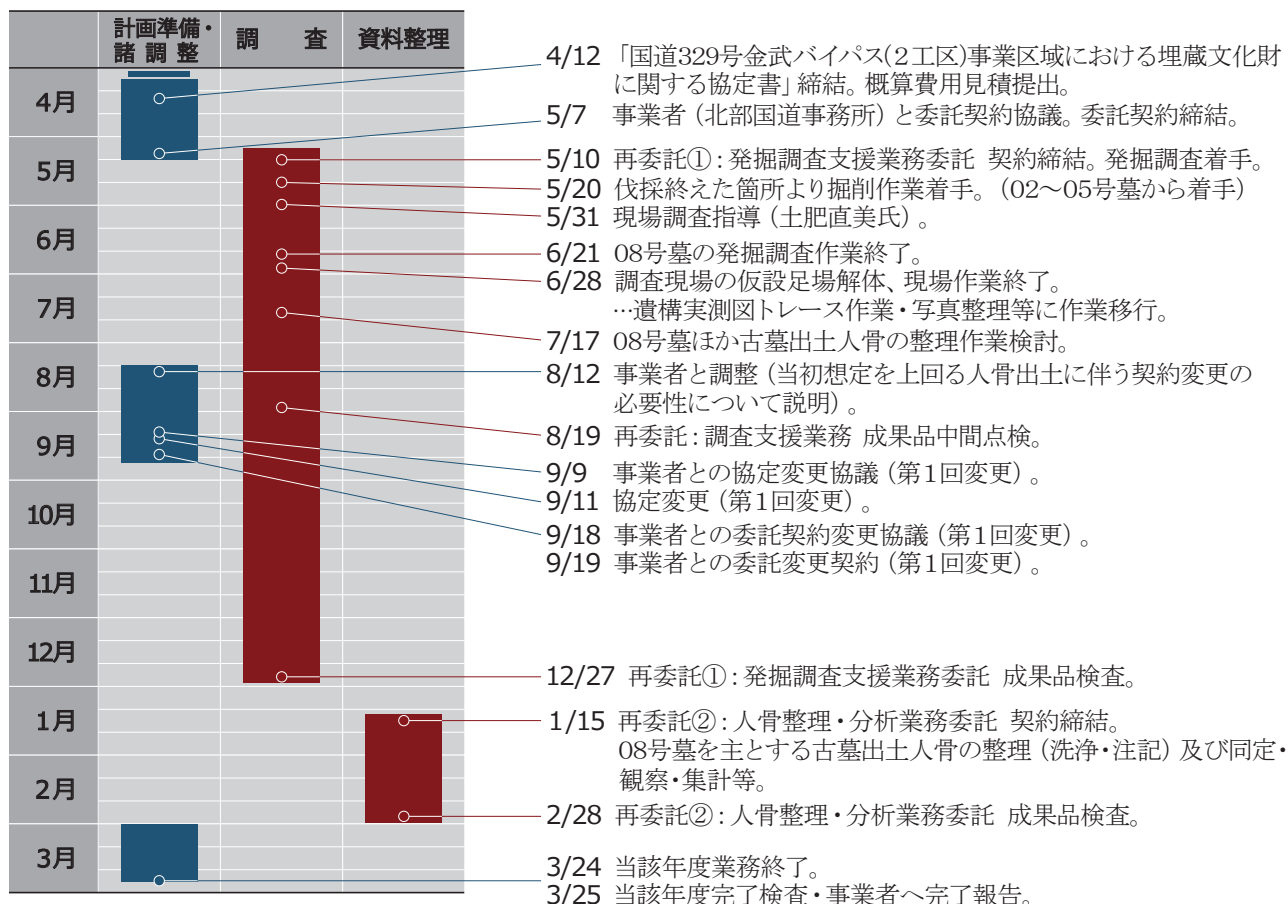


図1.2. 平成25（2013）年度 工程実績



写真1.1. 発掘調査作業風景（平成25年度）

001. 発掘調査（第1次）作業風景：03号遺構周辺  
002. 発掘調査（第1次）作業風景：08号墓



## 平成26（2014）年度

事業期間 平成26年10月1日～平成27年3月31日

事業費（精算額） 10,144千円

事業内容 発掘調査（第2次）

経過要約 第1次調査区隣接の工事計画区域内で新たに古墓群を確認、発掘調査の実施が必要となったことから、平成26年5月30日に協定書変更（第2回変更）、同年9月30日に委託契約締結し、翌日から業務着手。

工事予定地南半区の北側斜面地および南側斜面地における古墓群（計19基）を対象に発掘調査（第2次）を実施した。同年11月12日、協定書変更（第3回変更）をおこない、資料整理等を含む事業期間を平成28年度まで延長した。第2次発掘調査では蔵骨器類の大量廃棄や町内初の事例である獣骨埋設遺構（19号墓）などを確認した。平成27年3月27日、当該年度の業務終了。

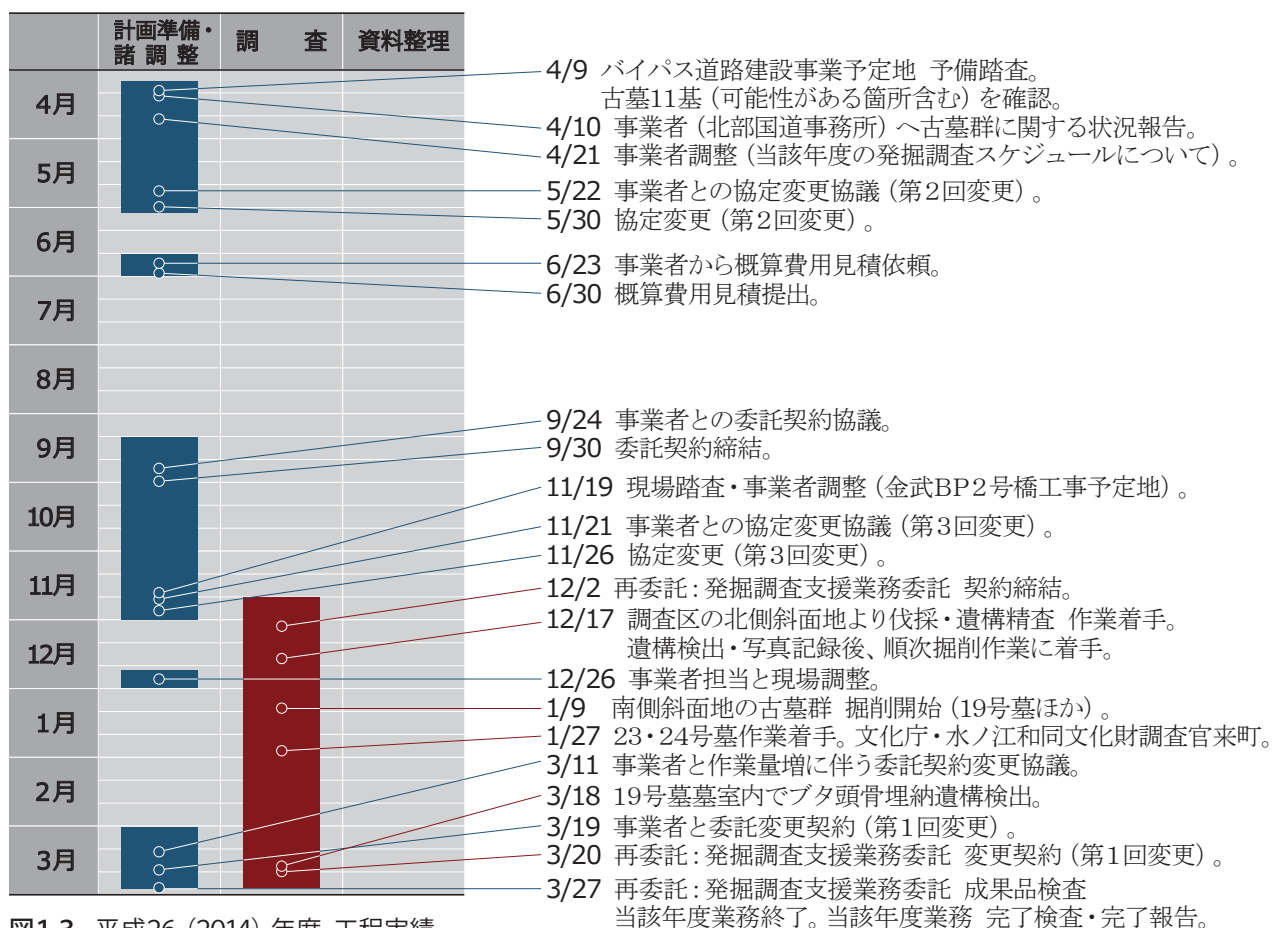


図1.3. 平成26（2014）年度 工程実績



写真1.2. 発掘調査作業風景（平成26年度）

003. 発掘調査（第2次）作業風景：13・14号墓周辺 遺構精査  
004. 発掘調査（第2次）作業風景：19号墓前庭部 遺物取上作業



## 平成27（2015）年度

事業期間 平成27年9月1日～平成28年3月31日

事業費（精算額） 3,469千円

事業内容 資料整理（蔵骨器等の接合・復元、被葬者人骨整理・分析、金属製品保存処理）

経過要約 当該年度の業務は平成27年9月1日に着手した。陶製蔵骨器（厨子甕）を主とする古墓群出土遺物の接合・復元作業を教育委員会直営で実施すると

もに、人骨調査（整理・分析）及び金属製品保存処理を再委託で実施した。被葬者人骨及び蔵骨器・陶磁器類の資料整理に要する作業量・期間が当初想定を上回ることから（写真1.3）、委託者・受託者協議を経て、平成28年1月8日付の協定書変更（第4回変更）で平成29年度まで事業期間延長をおこなう。平成28年3月29日、当該年度の業務終了。

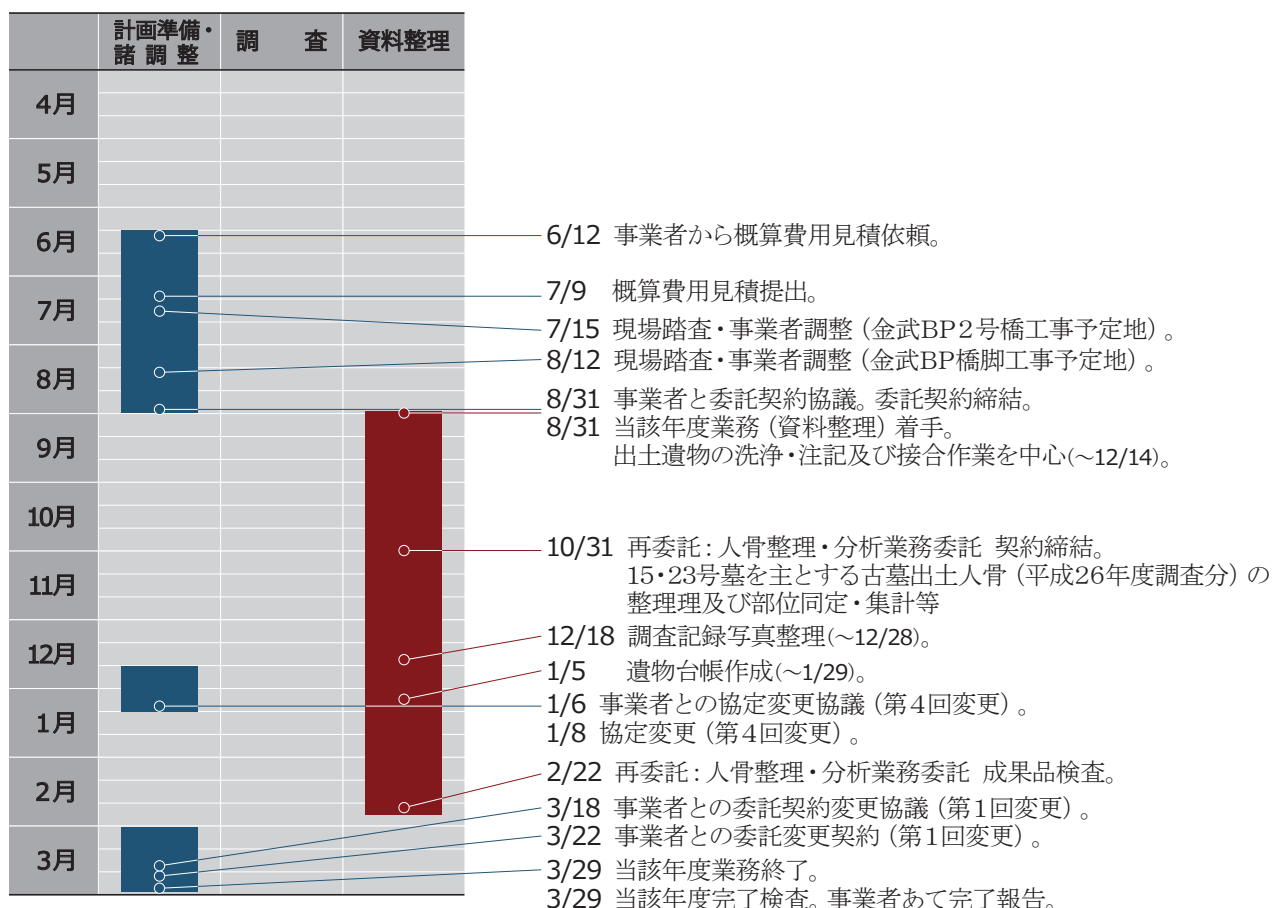


図1.4. 平成27（2015）年度 工程実績



写真1.3. 資料整理等作業風景（平成27年度）

005. 出土遺物の接合・復元 作業風景  
006. 被葬者人骨調査風景（土肥直美氏による人骨観察）



## 平成28（2016）年度

事業期間 平成28年7月2日～平成29年3月31日

事業費（精算額） 7,589千円

事業内容 資料整理（遺物実測・デジタルトレース及び写真撮影、貝類遺体分類）

経過要約 当該年度業務は平成28年7月1日に着手した。前年度に接合復元をおこなった蔵骨器を主とする出土遺物約120点の図化作業（遺物実測・デジタルトレース及び写真撮影）を教育委員会直営及び再委託で実施するとともに、古墓群出土の動物遺体・貝類遺体の選別・分類作業も実施した（写真1.4）。平成29年3月31日、当該年度の業務終了。

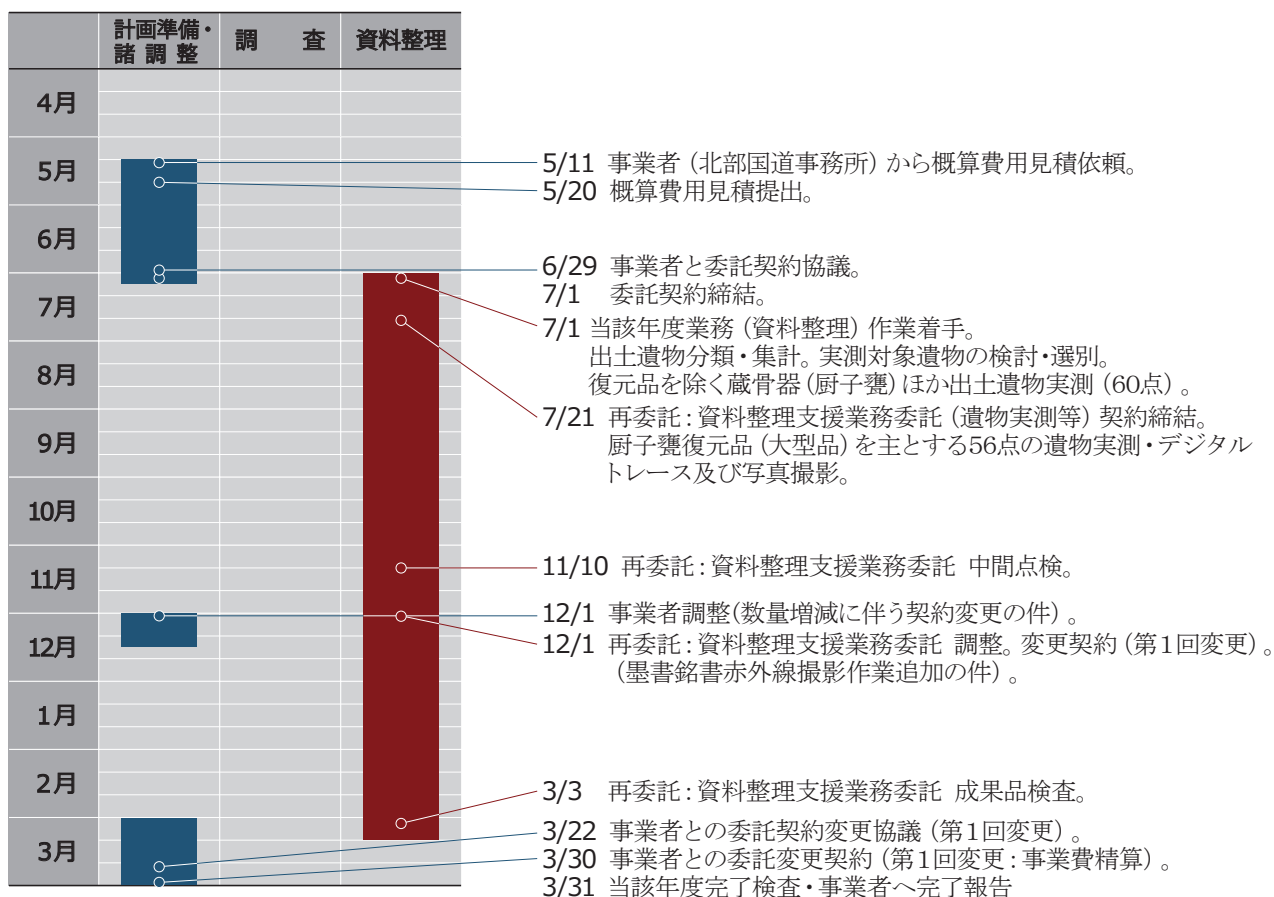


図1.5. 平成28（2016）年度 工程実績

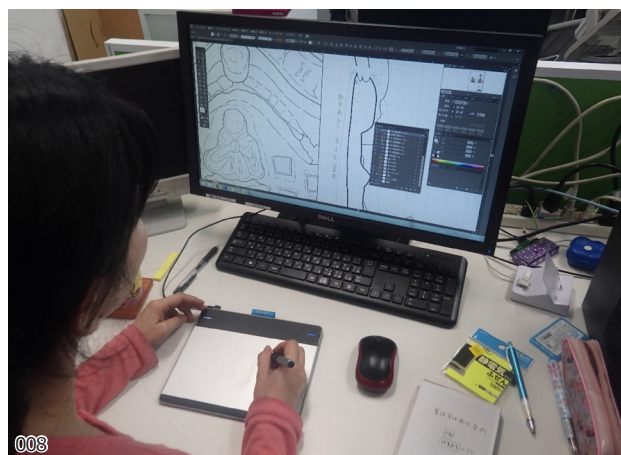


写真1.4. 資料整理等作業風景（平成28年度）



## 平成29（2017）年度

事業期間 平成29年10月3日～平成30年3月30日

事業費（精算額） 4,593千円

事業内容 資料整理（遺物復元）、報告書作成

経過要約 当該年度業務は平成29年10月3日に着手した。古墓出土品の大半を占める蔵骨器は接合復元及び図化を終えていたが、破碎・廃棄された状態で出土しているため欠損も多く将来の収蔵保管に不安がある

ことから樹脂材による欠損部復元を再委託で実施した（写真1.5）。当該年度初期に予期していなかった基地内埋蔵文化財の緊急案件への対応等で町教育委員会直営の整理作業進捗に影響が及ぶ事態となり事業期間延長が必要となったため、平成29年7月11日、協定書変更（第5回変更）をおこなう。平成30年3月28日、当該年度の資料整理業務を終了。

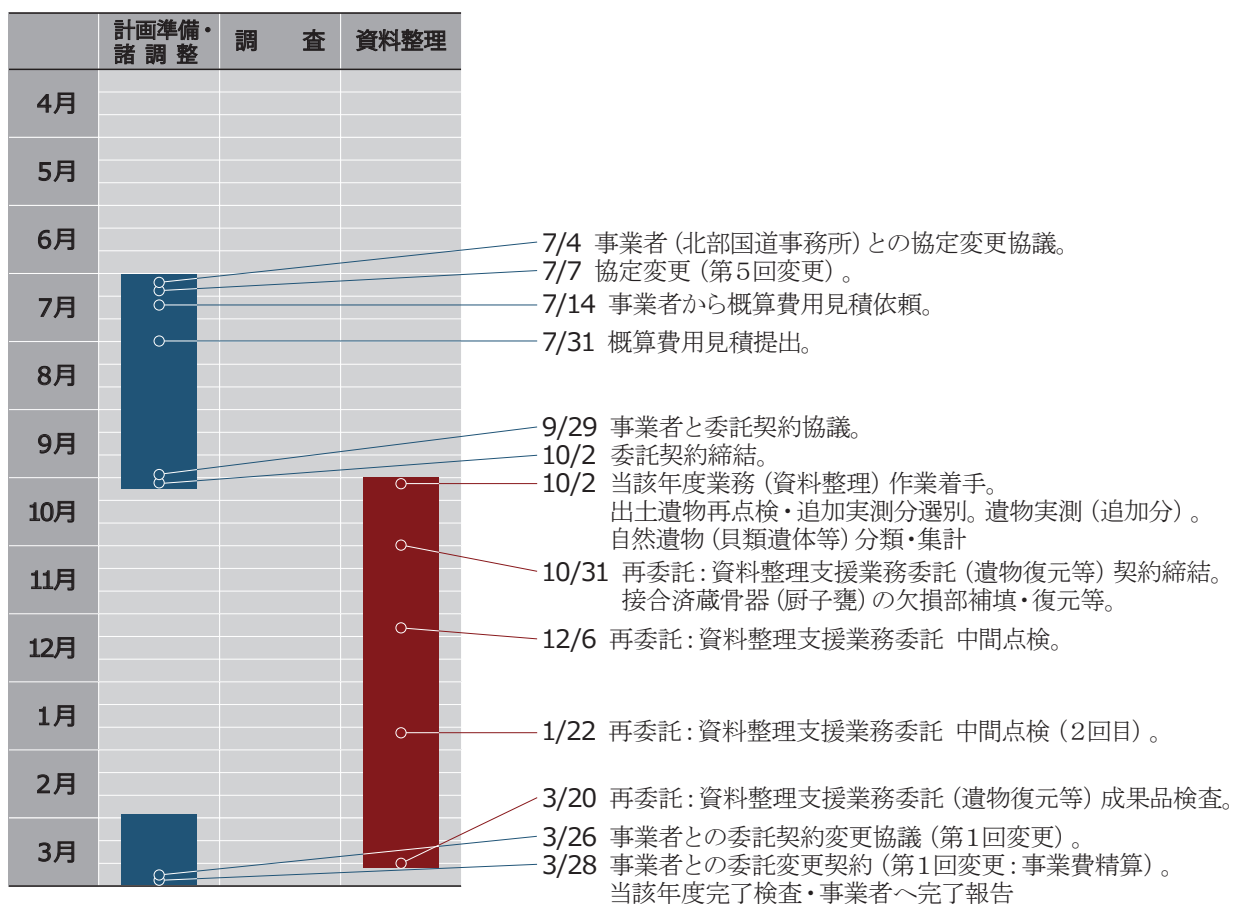


図1.6. 平成29（2017）年度 工程実績



写真1.5. 資料整理等作業風景（平成29年度）

009. 樹脂材による欠損部補填復元 作業風景  
 010. 欠損部補填・復元後の蔵骨器（厨子甕）



## 平成30（2018）年度

事業期間 平成30年8月1日～平成31年3月29日

事業費（精算額） 2,955千円

事業内容 発掘調査成果の公開（企画展）、報告書作成・印刷製本

経過要約 平成30年7月31日に委託契約締結、8月1日より業務着手。当該年度は事業最終年度にあたり、資料整理総括及び発掘調査報告書の作成・刊行をおこ

なう。報告書作成に係る作業と並行して、住民対象に発掘調査成果を公開する目的で、企画展「ずしがめ総選挙—金武バイパス発掘調査出土品展—」（於 金武町立図書館）を同年8月15日～8月31日の期間で開催した。

企画展終了後に、遺構・遺物実測図デジタルデータの図面調製や原稿執筆等、報告書作成に係る諸工程の作業を本格化させた。

	計画準備・諸調整	調査	資料整理・報告書作成
4月			
5月			
6月			
7月			
8月			
9月			
10月			
11月			
12月			
1月			
2月			
3月			

7/26 事業者（北部国道事務所）から概算費用見積依頼。概算費用見積提出。

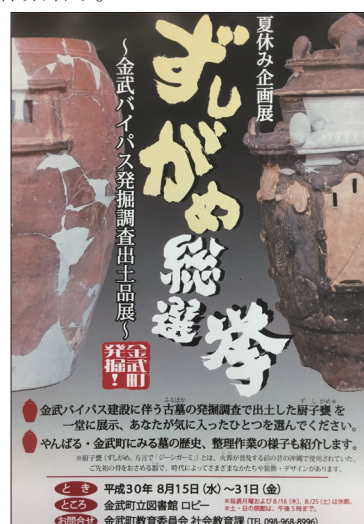
7/31 事業者と委託契約協議。委託契約締結。

8/1 当該年度業務（資料整理）作業着手。

8/15 発掘調査出土品展示「企画展ずしがめ総選挙」。（8/31まで）

9/1 報告書原稿作成・編集作業着手。

2/1 報告書印刷製本請負業者決定。



発掘調査企画展ポスター

図1.7. 平成30（2018）年度 工程実績



011



012

写真1.6. 資料整理等作業風景（平成30年度）

011. 資料整理指導（島袋春美氏による貝類遺体分類指導）

012. 発掘調査出土品展 開催風景（発掘調査成果の一般公開）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 金武町の地誌的概観（位置と概況）

金武町は沖縄本島東岸部のほぼ中央にあって、県庁所在地の那覇市から約45km、本島北部地域の中核市である名護市から約28kmに位置する沖縄県国頭郡の町である。北は恩納岳連山を境として恩納村と背接し、北東に宜野座村、南西はうるま市に隣接、南は金武湾（太平洋）に面しており彼方に勝連半島及び平安座島・宮城島・伊計島の島々を望む。町土の東西距離は約12km、南北の距離は町の東部で約7km、西部で約3kmの三角形に近い平面観を呈しており、町域面積は約37.84km<sup>2</sup>（3,784ha）。

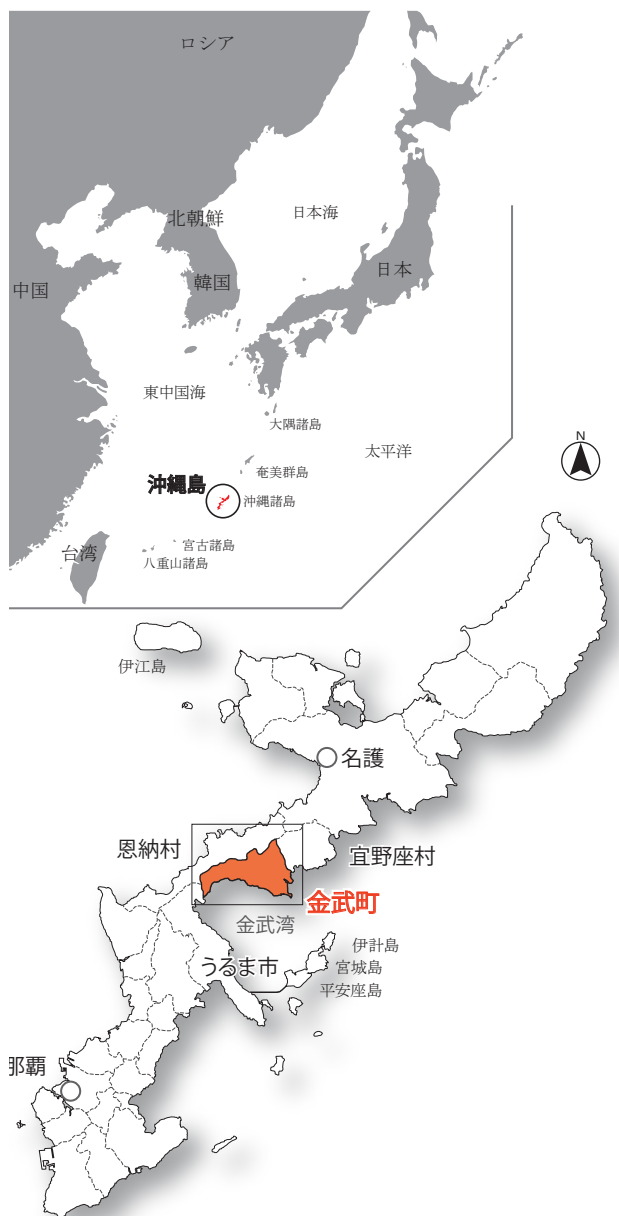


図2.1. 沖縄島及び金武町の位置

本町は、国頭郡の南端に位置し、本島中南部からみればかつて“金武山原”<sup>チン・ヤンバル</sup>とも呼ばれたように、本島東岸部においてやんばる（山原）＝本島北部への玄関口に当たる地域で、北部と中南部の結節点に位置する。明治期までは各村落近くの湊を山原船で結ぶ海上輸送を主とした交通体系であったが、陸上交通網が整備された現在は、主要幹線道路の国道329号及び沖縄自動車道が東西に横断し、県道88・104号線が本島西岸部（恩納村側）へのアクセス道路として展開している。

本町は、字金武の中川区・並里区・金武区、字伊芸の伊芸区、字屋嘉の屋嘉区、の3字5区で構成される。町東部には琉球石灰岩が分布して広大な台地を形成しており字金武の金武・並里集落が展開、戦前においては（都市部を除いて）県内有数の集落規模であった。三角形の鋭角状に狭まる町西部では丘陵地が海岸線付近まで迫り、河川が形づくる沖積低地や浜堤に字伊芸、字屋嘉の集落が立地している。

本町における米軍基地面積は21.07km<sup>2</sup>（2,107.6ha）で、町域東部の石灰岩台地（字金武の集落北部）を含む内陸の大部分ほか町域面積の55.6%を占め（平成27年3月末現在）\*、町土利用を大きく制約している。なお、市町村面積に占める米軍施設面積比率では、在日米軍全体の70.4%超が集中する沖縄県のなかでも2番目に高い。本町の地目別面積構成比は、宅地10.8%、田・畑29.4%、山林・原野9.4%、その他50.4%となっている（平成28年1月現在）\*\*。

本町の人口は11,506人、世帯数は計5,315戸を数える（平成30年1月末現在）。国勢調査人口にみる動態では、1960年（昭和40）以降、9,000人台～10,000人台で推移してきたが、2010年（平成22）に11,000人台となり、その後も微増傾向が続いている。

戦前は農業・林業を主とする純農村地域であったが、現在は、産業別就業者人口において第3次産業が全体の2/3程度（67.0%）を占めており今後もその増加傾向が予想されるのに対して、第1次・第2次産業はともに20%未満の状況である。農林水産業の主要生産物としては、花卉やサトウキビ、豚などがある。金武大川や日秀洞（金武鍾乳洞）に代表される湧泉や鍾乳洞が多く分布しており、豊富な水資源を活用した田芋や水稻は本町の特産物として広く認知されている。近



年では、熱帯果実（マンゴー）、ぶなしめじ、養鰻も町特産品として市場での認知度も高まりつつある。

本町は、“沖縄海外移民の父” 當山久三やフィリピン移民で活躍した大城孝蔵の出身地であり、県下でも海外移民を多く輩出した「海外雄飛の里」として知られている。また、商業・観光業分野ではタコライス発祥の町として、近年は億首川周辺の田園風景や自然資源を活用した体験型観光、基地跡地の再開発による医

療ツーリズム、スポーツ・ツーリズムを推進しており、かつての“基地の街” のイメージを払拭しつつある。

現在、本町では町民協働のまちづくりに主眼を置く「みんなで築く 夢と希望がもてるまち」を町の将来像に掲げ、第5次金武町総合計画（平成28～37年度）を基軸として各分野の諸施策を推進しているところである。

## 第2節 遺跡周辺の地理的・自然的環境

**気候** 亜熱帯海洋性気候に属する。年間平均気温は22.6℃（沖縄気象台金武観測所1979～2007年の平均値）で、1年のうち8ヶ月は平均気温が20℃を超え、四季を通じて温暖である。年平均降雨量は1,919mm（同）と比較的恵まれている。

**地形** 北側の恩納村との境界に沿って、石川岳（208m）、屋嘉岳（202m）、恩納岳（363m）、ジャフン岳（250m）、ブートゥ岳（214m）、ティーチュ岳（177m）が東西に連なる。これらの山稜から南側の海岸線に向かって緩やかな低位丘陵をなし、南側は金武湾・太平

洋に臨む。

大小10余りの河川が金武湾（太平洋）に注ぐ。全長8.0km、流域面積16.4㎡の億首川は本町で唯一の二級河川（水系）である。

小字浜田原以東の町域東半部では台地の発達が顕著で、町人口の6割以上を擁する金武・並里集落もこの台地上に立地する。伊芸区以西の町域西半部では海岸線近くまで丘陵が迫り、集落は丘陵裾付近の低地部に立地している。

**表層地質** 粘板岩・千枚岩・片岩類等からなる中生代後期の名護層と、砂岩及び砂岩粘板岩互層で構成さ



図2.2. 金武町域

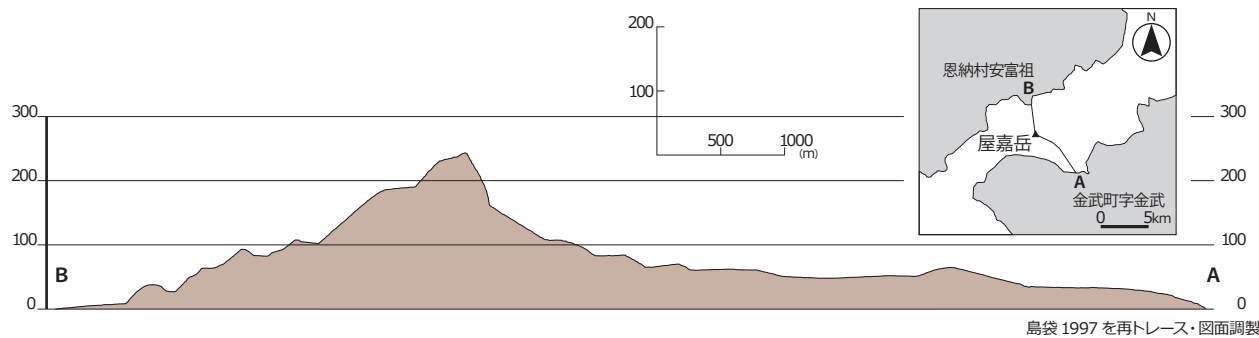
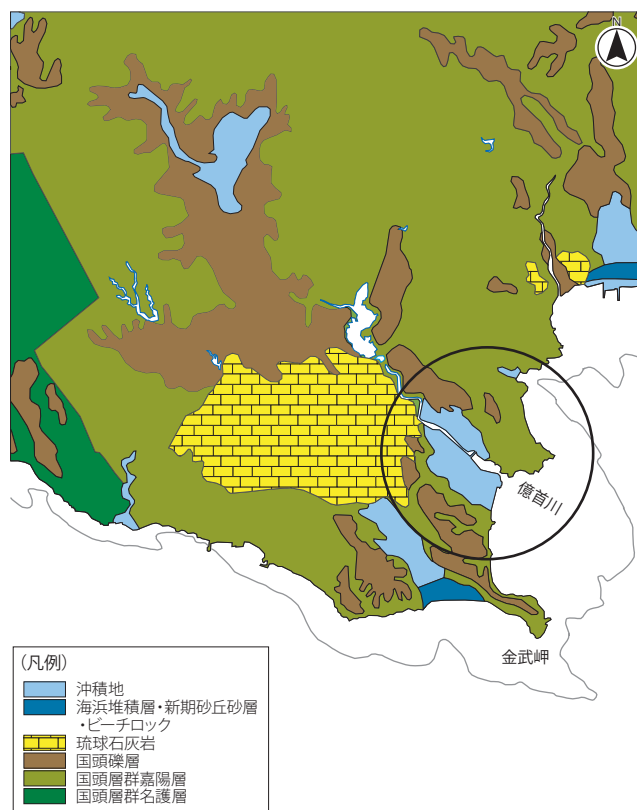


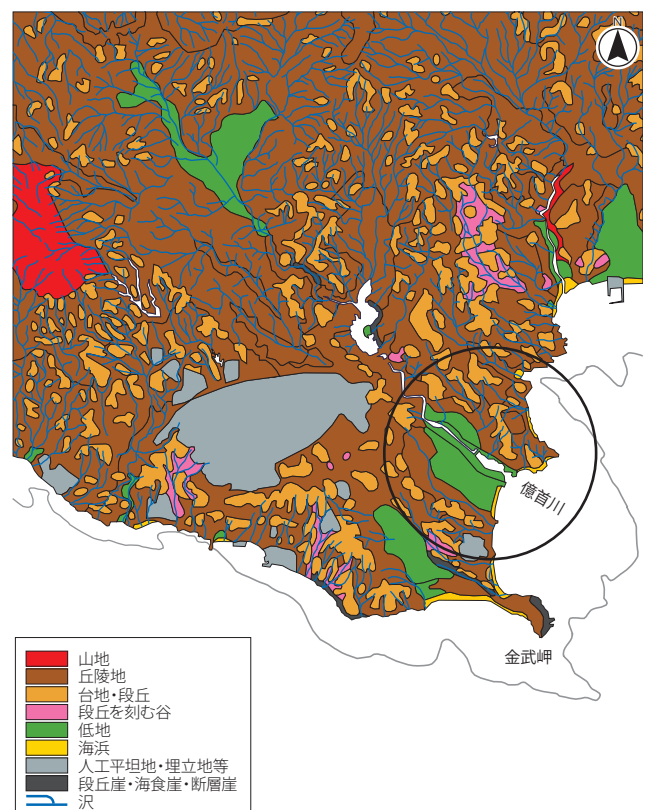
図2.3. 金武町地形断面図

れる新生代古第三紀の嘉陽層を基盤とし、第四紀琉球層群と呼ばれる国頭礫層及び琉球石灰岩が不整合にこれを覆う。琉球石灰岩が分布する町域東半部は鍾乳洞・湧泉が数多くあり、県下でも水どころで知られている。**植生** 町内全域にわたってリュウキュウマツ群落が発達している。山林地帯ではリュウキュウマツ群落とリュウキュウアオイ、イタジイ群集が混在し、集落に近傍の場所では、ナガミボチョウジ、クスノハカエデ、オオバギ等の石灰岩性植物も認める。海岸線付近では、防風・防潮林として植林され野生化したモクマオウが優占し、他にオオハマボウ、アダン等が自生する。

億首川河口付近の汽水域にはマングローブ林が発達しており、沖縄本島内で自生が確認されている4種のマングローブ樹種（メヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキ）が全て生育する\*。周辺の礫干潟や砂干潟も含む億首川下流一帯には、河川縦断方向とマングローブ林内外の横断方向でみられる環境差によって貝類・甲殻類・ハゼ類等の希少種を含む多様な動植物の生息が確認されており\*\*、環境省「重要湿地」にも選定されている。また、億首川下流域には渡り鳥も多く飛来し、優れた探鳥地としても知られる。



上図は、『1/50,000土地分類基本調査(表層地質)「金武・沖縄市北部」』  
沖縄県 1992年 を一部抜粋し、改変・トレース



上図は、『1/50,000土地分類基本調査(地形分類)「金武・沖縄市北部」』  
沖縄県 1992年 を一部抜粋し、改変・トレース

図2.4. 表層地質分類図（金武町東部・億首川周辺）

図2.5. 地形分類図（金武町東部・億首川周辺）

\* 金武町教育委員会編『金武町億首川マングローブ調査報告書』1993年

\*\* 金武町教育委員会編『億首川の自然ハンドブック1 汽水域・マングローブ林内のハゼ類』『億首川の自然ハンドブック2 汽水域・マングローブ林内のカニ類』2016年



### 第3節 遺跡周辺の歴史的環境

先史時代 本町域内においては、これまでに30余の埋蔵文化財が確認されている（図2.6）。本町で最古の資料は、億首川河口付近の西先謝原遺物散布地で採集された縄文時代前期（沖縄貝塚時代早期：約5,000年前）の条痕文系土器である。億首川下流周辺には飛留喜田原A遺跡や頭呂地原遺物散布地など縄文時代後・晩期（沖縄貝塚時代前・中期）、弥生～平安並行時代\*（貝塚時代後期）、グスク時代初期など各時期所産の遺物が複数の地点で確認されており、（先史時代の金武・並里区域においては）当該地域が集落適地として選択され続けたことが窺える。また、これらの遺物散布地は海岸線に程近い沖積低地や台地縁辺部に所在しており、県内の遺跡分布にみる模式的な立地状況が億首川周辺でも窺える。しかし、各遺跡の帰属時期推定の根拠となる土器等の遺物は、採集または二次堆積層（崩積層）からの出土が大半で、貝塚や住居・埋葬施設等の遺構検出例には、いまだ恵まれていない。



写真2.1. 町域内出土の先史時代遺物（土器・石器等）

グスク時代・古琉球 貝塚時代後期の終末段階にあたる10～11世紀頃、人々は漁撈採集を主とする食料獲得経済段階から、農耕の本格的開始による食糧生産経済に移行する。本町においても主要な資源供給地であるサンゴ礁環境に近い海岸線付近から離れ、未開地の内陸部へと生活営為の拠点を移していく。金武鍾乳洞

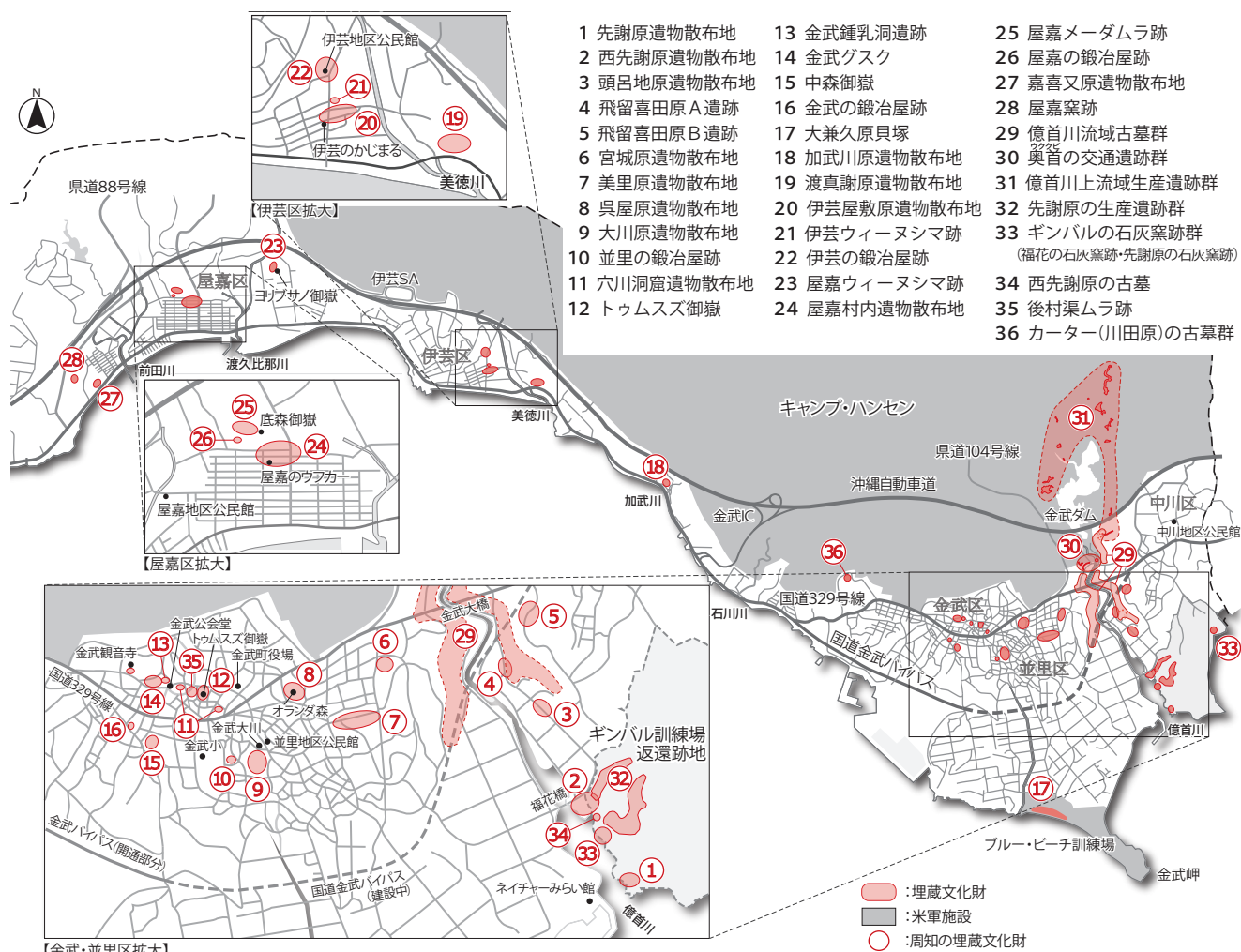


図2.6. 金武町域内の埋蔵文化財（遺跡地図）

\* 沖縄諸島の先史時代区分名称については、『新沖縄県史 各論編第二巻 考古』における「沖縄県史考古編年表（沖縄諸島）」に準拠した。

遺跡からはグスク時代初期の土器、中国産陶磁器等が採集されており、石灰岩台地上にある他の遺跡や遺物散布地からも、滑石製石鍋・カムイヤキ・中国産輸入陶磁器（宋代白磁玉縁碗ほか）といったグスク時代でも比較的古手の時期の船載容器類を採集している。

沖縄本島各地に有力支配者が登場し、大型城塞グスクが築かれる13～14世紀頃までには、当町域でも内陸部開発及び集落の展開、支配者の出現があったものと推測される。琉球王国の中央集権体制が確立する15世紀以前に詠まれたオモロには、金武間切の領主を指す「きんのよのぬし（金武の世の主）」の名が登場する。

「金武」の地名がいつ発生したか定かではないが、現在確認できる文字資料では玉陵碑文（1501年）に刻まれた「きんのあんし（金武按司）」が最古である。また、恩納ノロ辞令書（1584年）には「きんまきり（金武間切）」の記載を確認できる。当時の金武間切は、現在の恩納村の名嘉真以北から名護市久志・辺野古までを含む広範囲の領域であった（図2.7上段）。

**近世琉球** 1673年、名嘉真・安富祖・瀬良垣・恩納の四村と辺野古・久志の二村が金武間切から分離され、それぞれ新設の恩納間切・久志間切として再編される。

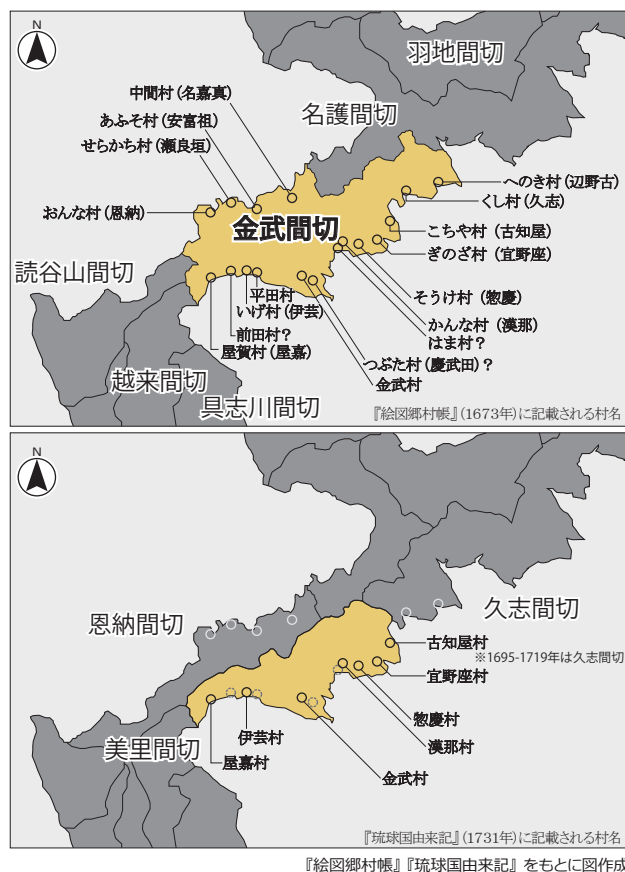


図2.7. 金武間切域の範囲変遷



写真2.2. 金武グスク近景

これにより、金武間切の範囲は現在の金武町及び宜野座村の範囲に縮小する（図2.7下段）。

1646年に成立した『絵図郷村帳』には、現在伝わる村名以外に、つぶた村（慶武田村）・平田村・前田村の名が登場する。それぞれ現在の並里区・伊芸区・屋嘉区にかつて存在した村であるが、「当時之無」の注記から、文献成立時にはすでに廃村となっていたか、隣接する村と合併したものと解される。

琉球最古の総合地誌『琉球国由来記』（1731年成立）に記載された間切域内の御嶽（ウタキ）も集落形成の考察に多くの示唆を与えてくれる。過去の予備調査でも町域各地で古島遺跡や鍛冶屋跡等、近世期の遺跡・遺物散布地を認めるが、『由来記』に記載される御嶽と重なる箇所も複数ある。しかし、近世の前段にあたるグスク時代・古琉球も含めて現集落以前の古集落の諸相に関する資料・情報は断片的であり、今後の調査研究の進捗に委ねる部分もまだ多い。

18世紀前半に確立した杣山制度は、本町の歴史において重要である。金武間切域における杣山面積は本島北部でも有数の規模であったことが明治期統計資料等から窺える。杣山から切り出された薪炭材等の林産物は、山原船で運ばれて本島中南部の泡瀬・与那原などで売られた。戦前期まで林産物は農産物と並び庶民の重要な収入源であり、集落や人々とヤマの関係は口碑にみる地域・場所の民俗地名（古地名）でも窺える。

**近代沖縄** 1879（明治12）年、琉球処分により沖縄県が設置された。1899（明治32）年の土地整理法、1908（明治41）年の沖縄県及島嶼町村制によって旧慣制度は刷新され、金武間切は金武村に、間切域内の各村は字に再編成された。



1899（明治32）年には、本町出身（並里区）の當山久三が沖縄海外移民の先駆となる第1回ハワイ移民の送り出しに成功し、以後、金武村は県下有数の移民村として栄えた。

1938（昭和13）年から開始された県営開墾事業により中川に新集落が形成され、村当局は「中川区」を新設した。戦前は並里区に属していた源原集落も1946（昭和21）年に中川区に編入された。

**沖縄戦～現代** 1945（昭和20）年の沖縄戦は、金武村にも少なからぬ影響を与えた。金武村を占領した米軍は金武・並里集落北側の広大な農地に「金武飛行場」を建設した。殆どの家屋は破壊され、屋嘉には沖縄最大規模の日本軍捕虜収容所（屋嘉捕虜収容所）が置かれた。本島北部（やんばる）東海岸地域には民間人収容所が集中的に置かれ、人口が急増した旧金武村東部の4字（東から漢那・宜野座・惣慶・松田）は、終戦の翌年、1946（昭和21）年に宜野座村として分村した。

1947（昭和22）年、米軍は旧金武飛行場周辺で射撃演習を開始した。1957（昭和32）年には飛行場跡地に兵舎（後のキャンプ・ハンセン）が建設され、海兵隊の移駐が開始される。ギンバル訓練場、ブルービーチ訓練場、レッドビーチ訓練場もこの時期に建設された。多くの村民が軍作業（基地建設工事）に従事するようになり、他地域からの人口流入も進んだ。純農村地帯であった金武村の産業構造は一変し、第1ゲート前には米兵向け歓楽街・新開地が形成され賑わった。

その後、1980（昭和55）年に町制が施行され、現在に至っている。

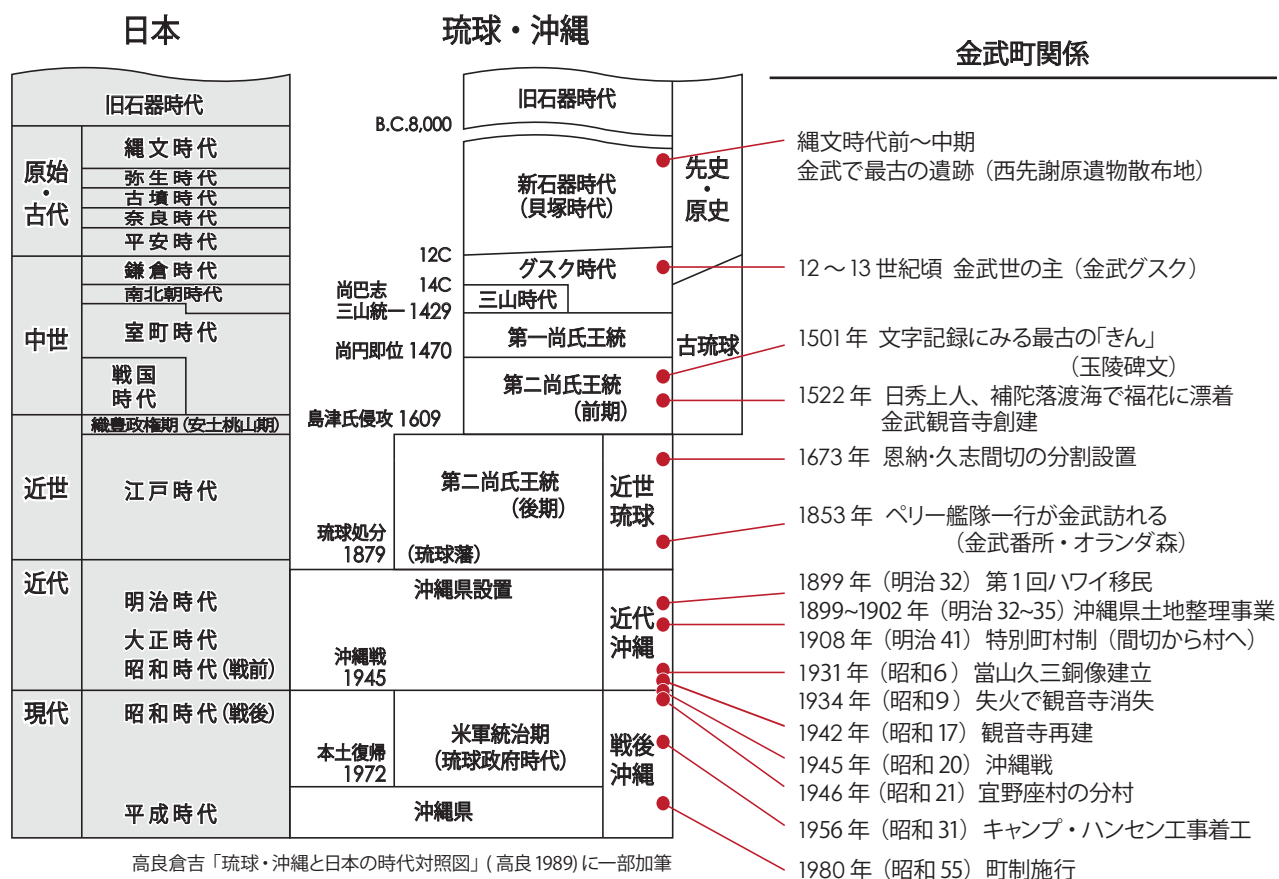


図2.8. 金武町における主な歴史的事象（歴史年表）

### 第Ⅲ章 遺跡概要及び調査方法

#### 第1節 億首川流域古墓群の概要及び調査方法

金武・並里集落が立地する琉球石灰岩台地の東縁、億首川右岸の丘陵斜面地一帯には地元で「ナーグスク」、「ミーチェ」と呼ばれる墓域が古くから存在する。川を隔てた左岸も含む億首川両岸の丘陵斜面一帯において、露頭する石灰岩岩盤の自然形状を利用した岩陰墓や堀込墓の墓群が密に分布する状況を過去予備調査で確認している\*。当町教育委員会ではこれを包括的に捉えて「億首川周辺古墓群」と呼称、所在する小字（ハル）や口碑等にみる小地名・古地名で地区設定を行ない、墓群の悉皆把握に努めているところである（図3.4）。

今回、バイパス道路建設に伴う発掘調査を実施した場所は、億首川流域古墓群でも最大規模の墓群を有する「ナーグスク・ミーチェ地区」の南側に位置し、億首川右岸の石灰岩台地・丘陵に連続する突端小丘陵の北側及び南側斜面地に墓群が存在する。事前踏査では地表面の不自然な窪みから墓室内が崩落した墓の可能性のある箇所も含めて計28箇所（基）を確認、基本的には北側

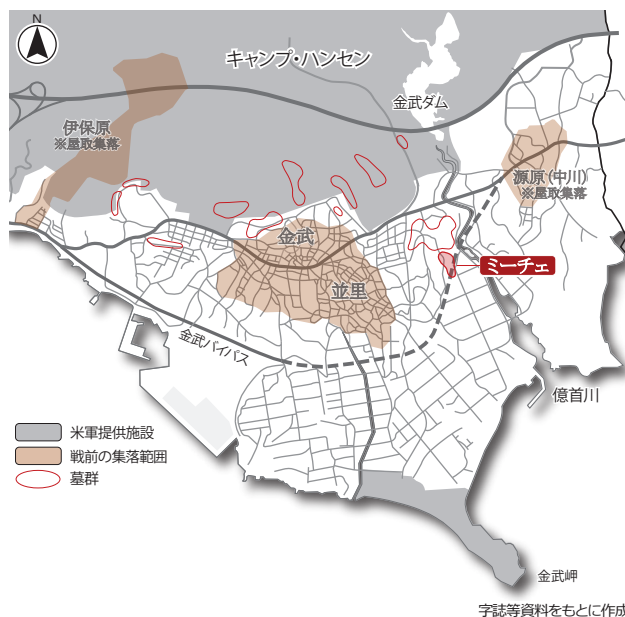


図3.1. 金武・並里集落周辺における墓群分布

から確認した順に連番号を付した。調査区は計画路線区域を南北で半分ずつに分け、第1次調査は北側斜面

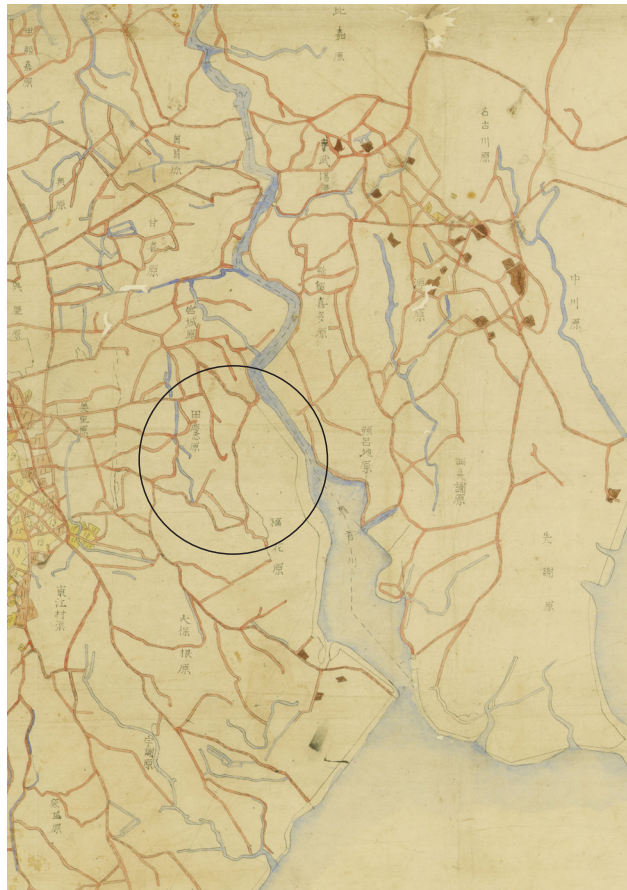


図3.2. 明治末期作成 間切図にみる「ミーチェ」周辺



写真3.1. 昭和19/ 9/ 29 米軍空撮写真にみる「ミーチェ」周辺

\* 金武町教育委員会編『町内埋蔵文化財予備調査報告書—億首川周辺（平成18～20年度）』（金武町の歴史と文化第4集）2010年。





図3.3. 「ミーチェ」周辺の地形及び億首川下流域一帯の民俗地名(古地名)

地の01～08号墓を対象に、続けて翌年度に実施した第2次調査では丘陵北側斜面地の残り及び南側斜面地に分布する09～27号墓を対象とした。当該調査区は重機搬入が困難な丘陵斜面地で周辺に耕作地もあることから、掘削は人力掘削で行なった。各墓の位置座標は、原則として墓口中央である。

## 第2節 遺構の分類(古墓)

今回の調査対象である墓は、露頭石灰岩岩盤が形作る岩陰の自然形状をそのまま利用した岩陰墓、岩陰や窪みをさらに掘り込み横穴式の墓室を構築する掘込墓に大きく分類できる(図3.6)。墓外観に関しては、岩陰を囲む石積の有無、墓室の閉塞状況等で岩陰囲込墓、壁龕墓などさらなる分類・呼称設定も可能ではあるが(名嘉真1999、上原2018など)\*、調査対象の殆どが移転・

\* 名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社 1999 年。

上原 静「沖縄における厨子文化と葬墓制(3) ―古墓の造形と厨子―」『南島考古』第37号 沖縄考古学会 2018 年。



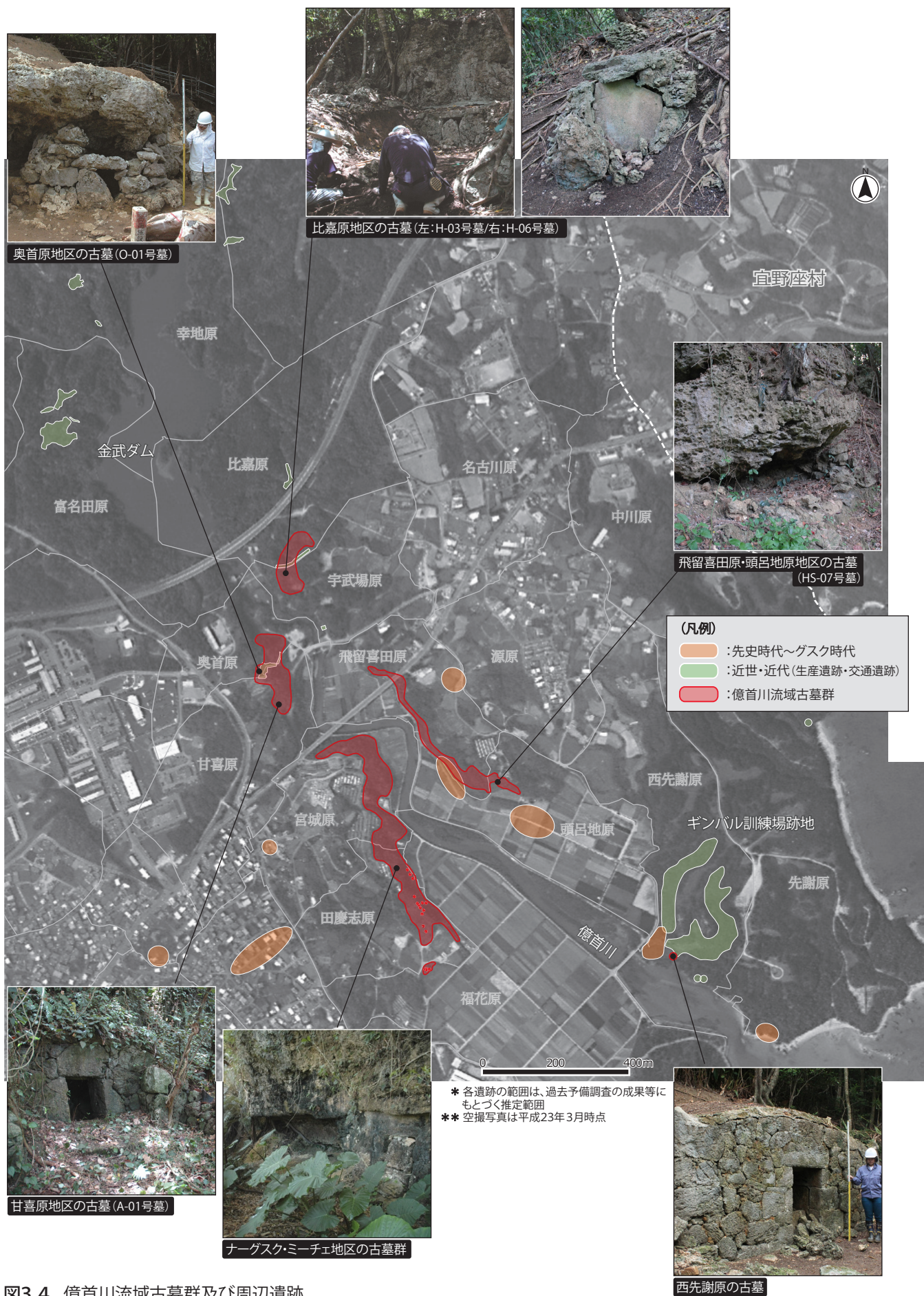


図3.4. 億首川流域古墓群及び周辺遺跡



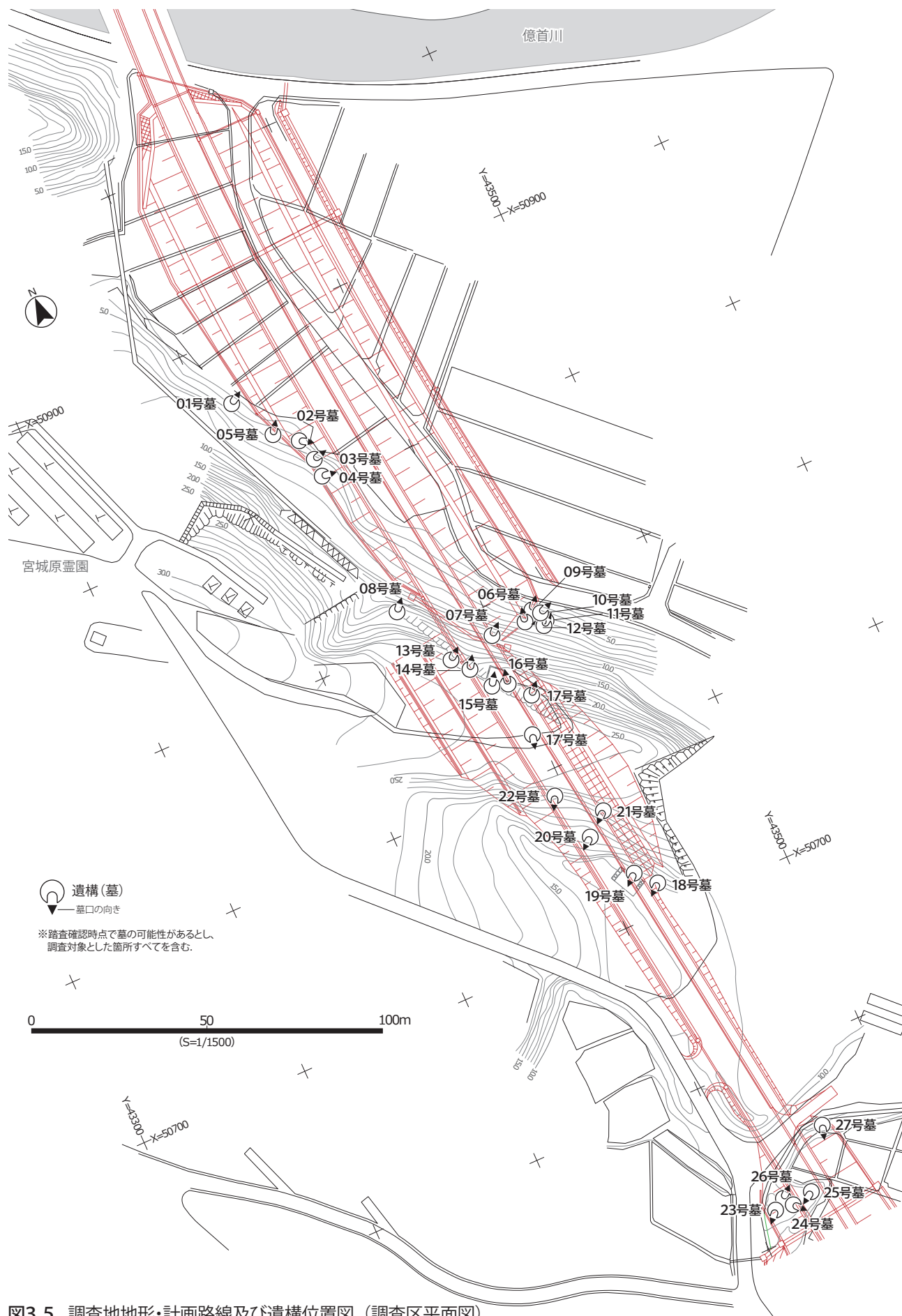


図3.5. 調査地地形・計画路線及び遺構位置図（調査区平面図）

使用終了した後の「空き墓」(墓口が開いた状態)であったことから、墓外観の詳細な分類は行なわなかった。

### 第3節 遺物の分類(蔵骨器)

古墓群出土遺物は接合後の個体数集計で総計296点、陶製の専用蔵骨器(厨子甕)が185点で遺物総数の6割超を占める(第IV章 表4.29. 出土遺物集計参照)。

専用蔵骨器以外には厨子甕転用品と推定される中国産陶器(褐釉陶器)、沖縄産無釉陶器の壺・水甕のほか、沖縄産施釉陶器や本土産近現代磁器の碗類、副葬品の煙管や簪、銭貨等の金属製品等が得られている。なお、今回の調査で石製厨子や板厨子は得られていない。

出土遺物の主勢を占める専用蔵骨器について、近世墓調査の蓄積がある那覇市・浦添市の過去報告書や厨子甕の分類・編年に関する先行研究\*を参考にしながら、以下のように分類した。

1. 無頸甕形(ボージャー形)
2. 有頸甕形
3. 有頸底付き甕形
4. 陶製家形(御殿形)
5. 外反甕形
6. 火葬用納骨器・その他

#### 1. 無頸甕形(ボージャー形)

身は、丸く肥厚する口縁部に無頸またはごく短い頸部に象徴され、方言で「ボージャー」と呼称される。肩部や胴部の膨らみ、窓枠の造形等の特徴に時期的変化(新旧関係)が認められる。今回の調査で得た当該タイプは、肩が張り胴部が膨らむもの、肩や胴部があまり膨らまないものに分類でき、前者では窓枠が強く張り出す場合が多いが後者は張り出しも弱く、時期差と考えられる。窓枠は数種類に分類でき(安里2006)、今回出土品では平葺形・唐破風形は認められるが、寄棟形の窓枠はみられない。

蓋は鐳を持たない笠形で、撮(つまみ)の形状等で分類できる。

#### 2. 有頸甕形

大抵の場合でマンガン施釉されることから、「マンガン」と汎称されるものである。身は頸部が立ち上がり、頸部と肩部が境が明瞭な器形に、横位突帯や沈線(沈線)主体による文様の簡略化、サイズの小型化も当該タイプの特徴に挙げられる。

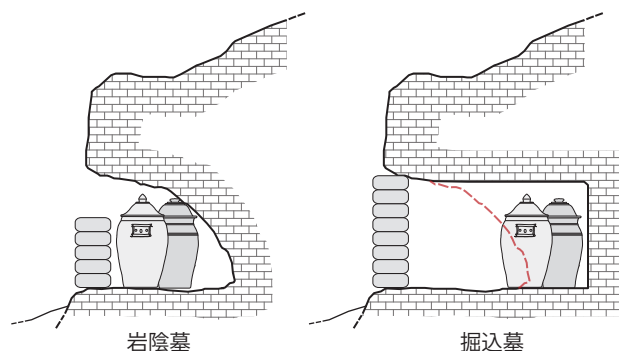


図3.6. 岩陰墓と掘込墓(分類概念)

るパターンが一般的である。屋門を中心に貼付文や線彫(沈線文)による蓮華、僧形人物等の文様装飾を配置するが多い。屋門には唐破風形・アーチ形などがあり、屋門の形状や文様意匠等で分類も可能である。

蓋は膨らむ体部に鐳がめぐる鉢形で、撮(つまみ)は宝珠形・饅頭形・偏平形など複数種類がある。

#### 3. 有頸底付き甕形

有頸甕形に瓦屋根の底が付くタイプ。貼付文による文様区画や文様装飾(蓮花・僧形人物・獅子など)が施されるパターンが多い。今回調査では1点のみ出土。

#### 4. 陶製家形(御殿形)

今回の調査では、いわゆる赤焼家型(御殿型)の蓋破片2点(おそらく同一個体)が得られているのみである。

#### 5. 外反甕形

有頸甕形とともに、「マンガン」と汎称する蔵骨器の範疇で扱われる場合もあるが、あまり膨らまない胴部に口縁部が外反する器形的特徴から、有頸甕形タイプに後続し、時期的には新しいと推測されるタイプ。線彫(沈線)主体による文様の簡略化、サイズの小型化も当該タイプの特徴に挙げられる。

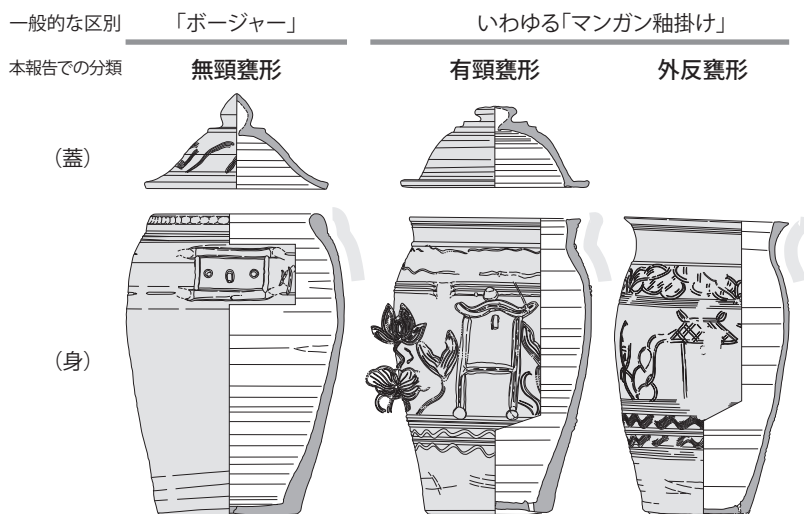


図3.7. 陶製専用蔵骨器(厨子甕)分類

\* 那覇市教育委員会編『銘苅古墓群(Ⅰ)』(那覇市文化財調査報告書第39集)1998年、『銘苅古墓群(Ⅱ)』(那覇市文化財調査報告書第40集)1999年、安里進「Ⅲ. 厨子甕の編年」浦添市教育委員会編『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者』(浦添市文化財調査研究報告書第25集)1997年 など。